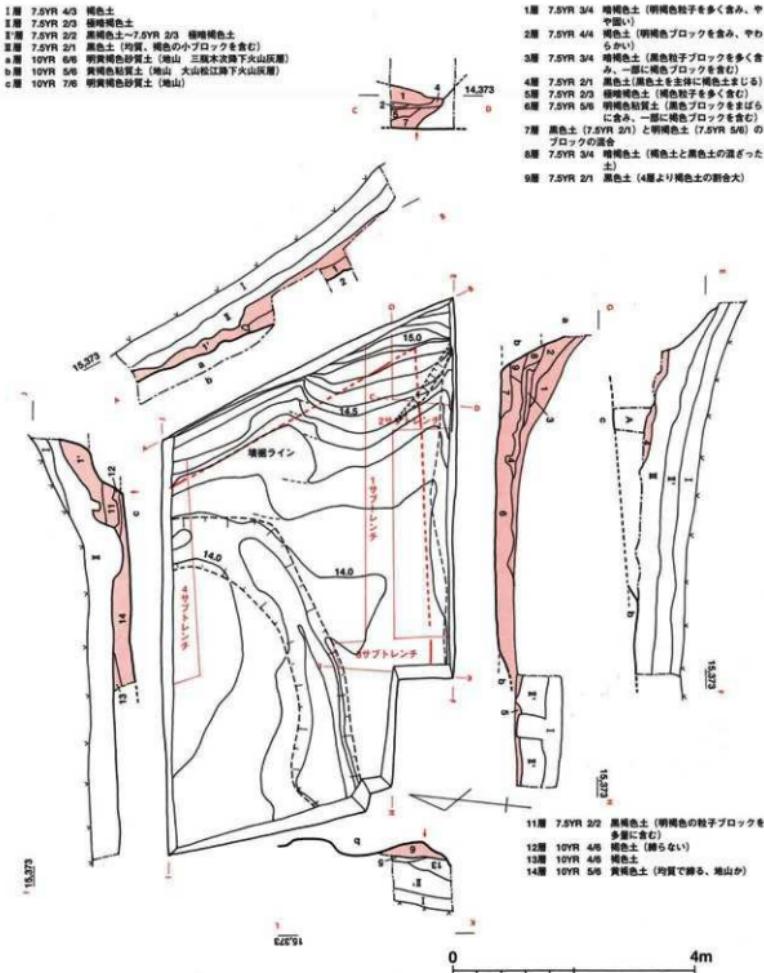


第50図 6 ドレンチ、7 ドレンチ、8 ドレンチ、11 ドレンチ実測図 (S=1/80)



第51図 くびれ部 5 トレンチ実測図 (S=1/80)

(埴丘側から外堤側)に向かってわずかながら下に傾斜している。底面のレベルは、東側(埴堀側)で標高13.39m、西側(外堤側)で13.19mを測る。周溝の形成にあたっては、外堤側は地山を切り込んで形作っているが、埴丘側は盛土によって埴堀を作っている。盛土は明褐色土、黒褐色土、褐色土を15~30cmの厚さで交互に水平に積み上げている。埴堀の盛土はマンガンバンドの直上に施されており、このマンガンバンドが上下2枚の軽石層の境に形成されたものであることからすると、こ

の墳裾盛土は一度地山を削った後に行われたものであることは明らかである。あるいは、墳丘築成にあたって、まず大略を削り出す工程があり、最終的に仕上げを部分的にさらに削り出したりあるいは盛ったりというこうとを行った結果とも考えられる。墳裾の位置は、以前島根大学の測量調査で推定された位置よりやや西側（外堤側）になるとわかった。

外堤部は、周溝の立ち上がりから約23m西に向かって調査を行った。この部分は表土から10cm前後ときわめて浅い部分で地山に達する。基本的にはだらかに西に向かって下っているが、周溝から19.5m付近で傾斜がやや急になり、周溝から約22m（トレンチ西端から1m）の部分で傾斜が変換して西に向かってわずかながら上がる地形となる。この地形の変換点が外堤の範囲を示すという積極的証左はないものの、後方部での外堤部の想定規模と矛盾するものではなく、その可能性も十分にあるものと考えられる。

遺物は、周溝内の流入上から、埴輪の小片と、須恵器子持蓋が出土している。

(15) 7トレンチ

6トレンチの約15m南方、前方部の南コーナーに近い部分に、墳裾の状況を探る目的で設定したトレンチである。調査の結果、地山を加工した墳裾らしい傾斜変換点を検出することができた。しかし、地山面を覆う土も耕作土1層だけであり、検出した地山面の後世の改変も著しくまた耕作その他でかなり手を加えられていることがわかっている。よってこの変換点が当時の墳裾をそのまま残しているとは考えにくい。遺物は埴輪小片が出土している。

(16) 8トレンチ

7トレンチの南に接して、前方部の周溝の屈曲部を探る目的で南北方向に設定したトレンチである。調査の結果、耕作土下の地山面が北から南に向かって緩やかにドットしており、周溝の立ち上がり等はまったく検出できなかった。しかしながら、この部分は7トレンチ同様耕作等による改変が著しい部分であることや、6トレンチでは周溝が検出されていること、墳丘南側についても未調査とはいえない民家の間に周溝痕らしき地形のくぼみが見られることなどから、この部分にも周溝は存在していた可能性が高いものと思われる。ただその周溝も6トレンチで検出されたように浅いものであったと推定される。周溝としてはトレンチの南端で地山直上の褐色土を掘り込んだ土壤が検出されたが、その性格、時期等は不明である。遺物は埴輪小片がわずかに出土したのみである。

(丹羽野 裕)

(17) 11トレンチ

前方部の南コーナーに近い地点で、周溝及び外堤帯の状態確認のために設定した、長さ21m、幅2mのトレンチで、トレンチの東は前回調査した7トレンチが隣接している。調査の結果、トレンチ西端で周溝の西側立ち上がりを検出したが、深さ15~20cmと浅く、底面の標高は13.3mを測る。周溝底面の幅は、7トレンチの結果と併せて考えれば4.5m前後と推定される。

また、後世の耕作等による改変が著しく、外堤部分の状況については把握できなかった。

遺物は、埴輪の小片が出土している。

(広江 耕史)

3. くびれ部（5トレンチ）の調査

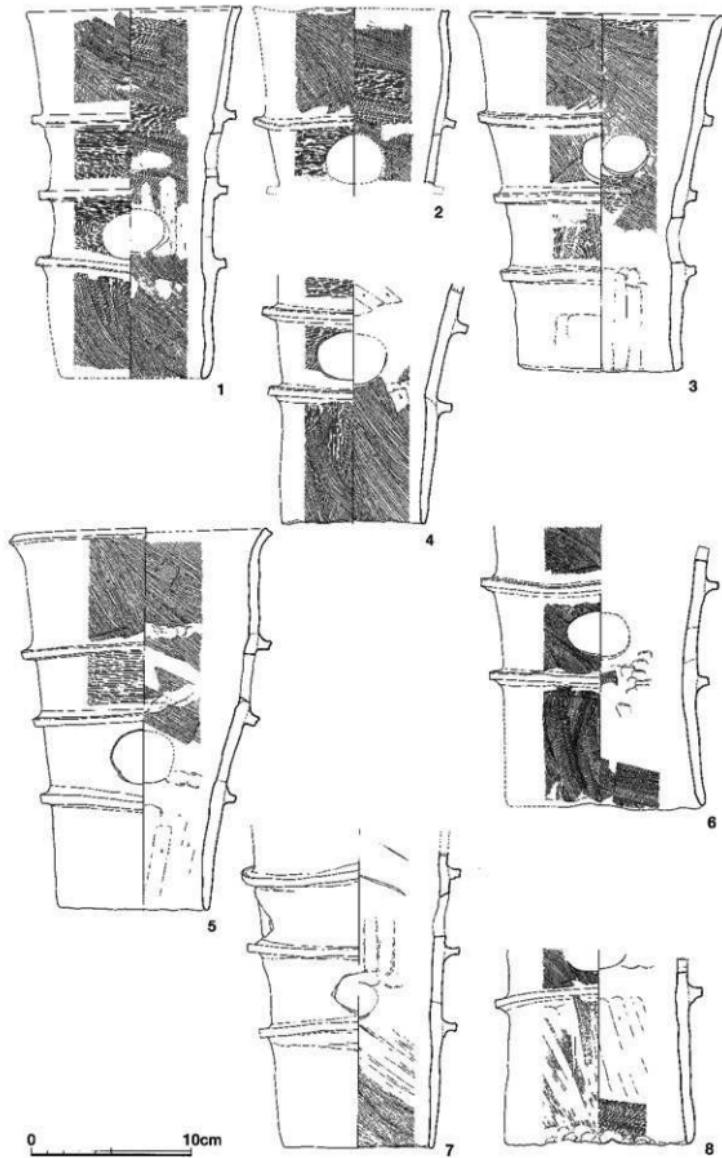
北側のくびれ部の状況を確認するためにトレンチを設定し、調査を行った。調査区は当初 6m × 4m の地形に合わせた平行四辺形に設定したが、調査を進めるにつれて、填縫が十分に確認できないことがわかったため、南に 1m、東に 1.5m 拡張した。調査の結果、くびれ部は当初の想定よりもはるかに複雑な状況を示していた。結論を先に述べると、鋭角に形成されたくびれ部分の填丘に、さらに盛土によってスロープ状の構造が付与されていたことが明らかになった。この盛土と填丘の関係を明らかにするため、最終的に 4 本のサブトレンチを設定して土層の確認を行った。まずは説明を簡便化するため、土層の大略を説明しておく。

- ・ I ~ III 層 ······ 後世流入、堆積した土層
- ・ 1 ~ 14 層 ······ 填丘築成後に施された盛土（第 8 図、網目の上層対応）
- ・ A 層 ······ 填丘を形成するために施された盛土
- ・ a ~ c 層 ······ 地山（填丘と填丘外の基盤を形成する）

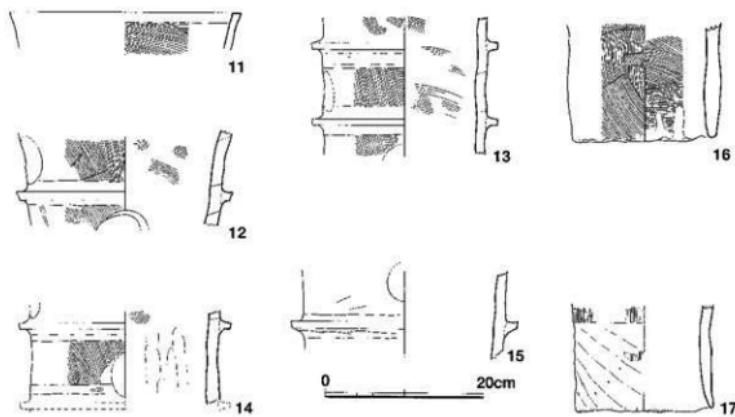
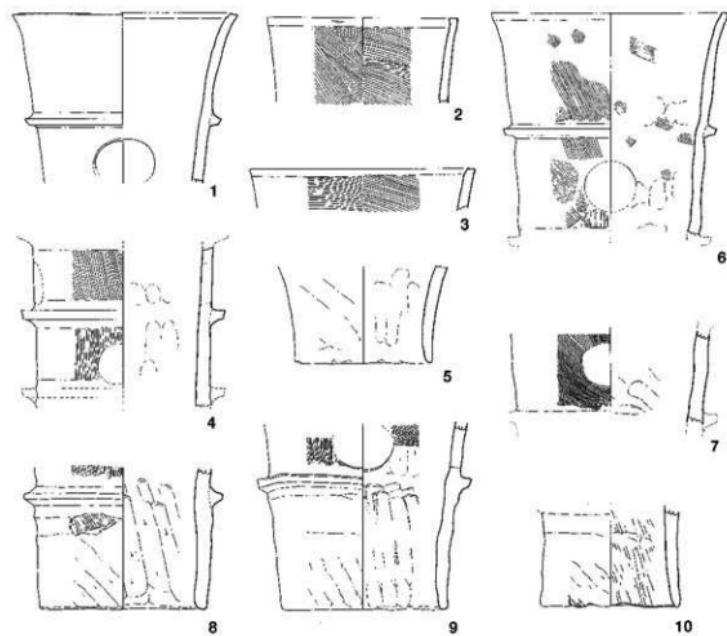
まずこの部分の填縫の状況であるが、最終的にスロープ状構造の保護のため全面で検出していないことから、サブトレンチでの状況をもとに復元するしかない。まず 1、4 サブトレンチの状況から、後方部側の填縫は地山を削り出して形成している。1 サブトレンチ、4 サブトレンチの状況から復元すると、後方部側の填縫は長軸方向とは直角ではなく、よって必然的にくびれ部では後方部と前方部がかなり鋭角に交わることとなる。

一方前方部側の填縫はやや複雑な状況を示す。まずくびれ部寄り（くびれ点から推定 0.9m）の 2 サブトレンチ（CDセクション）では、ほぼ水平に加工された地山の上に盛土をして填縫を作り出しているが、より西側（くびれ点から推定 5.2m）の 3 サブトレンチ（KLセクション）では地山を削り出して填縫を形成している。同様の盛土は前方部 6 トレンチでも検出されており、最終的な細かい填縫の調整が切り盛りで行われた可能性が高いことを示している。ところで堀の底面は、他の調査区ではマンガンバンド面を当てているが、このくびれ部周辺ではマンガンバンドを掘り込んで底面としている。ただし、東側（後方部側）の填丘では、マンガンバンド面で幅 20cm 程の平面が犬ばしり状に検出されており、あるいは一度マンガンバンド面を底面に形成した填丘を何等かの事情でさらに深く掘り込んだ可能性も考えられる。また EF 断面、GH 断面でわかるように、よりくびれ部寄り（くびれ点から推定 5 m 地点から東側）では地山を 1 段深く削り込んでいるが、その目的は不明である。

次に填丘に付設されたスロープ状の盛土だが、堀の底面及び填丘に密着して施されている。この盛土の大要は、まず前述の底面が深く掘り込まれた部分に、水平に近い形で盛られた（5、6、7 層など）後に黒色土や暗褐色土を後方部に向かって高く盛り付けている。これらの盛土は余り締まってなく柔らかいが、最上面（1 層上面）は固く締まっている。さてこの盛土はトレンチの北側で当初は把握できずに大部分を削ってしまったが、AB 断面、IJ 断面の観察から、後方部填丘に対しては北に向かって次第に低くなりながらもこのトレンチの範囲内全域で盛り付けていることがわかった。しかし前方部填丘に対しては、盛土の最上面から切れこむ形でその一部しか接しておらず、このスロープ状の盛土が主に後方部に向かって盛り付けられたものであることがわかる。しかもこの盛土の南端の落ち込み部分の方向から、このスロープは填縫の方向と水平、直角といった自然な方向ではなく、前方部填縫に対する角度は約 40°、後方部填縫に対する角度は約 25° の角度で取りついている。



第52図 くびれ部トレンチ出土埴輪実測図 (S=1/6)



第53図 1~4トレンチ出土、表探埴輪実測図 (S=1/6)
(1~5・1トレンチ出土、6~3トレンチ出土、7~10~4トレンチ出土、11~17~表探)

この方向を延ばすと墳丘上段の後方部中央に向かっているようであり注目される。

トレンチの北西半には幅70~80cm前後の溝が検出されたが、これは後世この部分が畑として使用された際に作られたものと考えられ、古墳とは直接関係ないものである。

遺物はスロープ状盛土の上に堆積した黒色土～黒褐色土を中心に埴輪、須恵器、十輪器が出土している。埴輪は、調査区の中央からやや南東コーナーよりのスロープの傾斜がやや緩やかになった部分を中心に出土している。出土状況は、スロープ上に5~10cm程度黒色土が堆積した上に、比較的1個体がまとまった形（図版8参照）で出土しており、おそらく直上の段平坦部に樹立していたものが流れ落ち、他の箇所と違ってスロープがあったために比較的破損が少ないままに遺存したのではないかと推測される。

須恵器は手持ち壺を中心に出土している。数個体出土し、出土状況は埴輪と同様であることから、使用状況が埴輪に近いものであったとも考えられる。また3層黒色土中からは奈良時代前後の須恵器坏（第58図8）が出でており、この層の堆積時期を表しているかも知れない。後方部4トレンチでも、最初に堆積した黒色土より同様の須恵器が出土しており、古墳やその周間に木々が繁茂する時期を考える上で貴重なデータとなるのではないか。また手捏ね土器が出土しており（第58図9）この部分で何等かの祭祀が行われたことが考えられるがその時期は不明である。

さてこのスロープ状の盛土の時期であるが、次のような理由で古墳築造直後のものと考えられる。

① 遺物の出土状況から埴輪等が流れ出す時期以前であることが明らかであること。

② 墳丘や堀の底面に直接接しており、流入土等何等かまないこと。

スロープ状盛土の性格については、調査範囲が狭いこともあって、十分な判断材料を持たないが、墳丘方向と無関係に付設されていることから、埴輪の形を調整する目的でないことは明らかである。

一方、上面が固く締まっていることから、盛土上が踏みしめられた可能性があり、またスロープの方向が後方部中心を向いていることから埴輪、特に後方部中心主体部への通路の可能性を指摘しておきたい。

（丹羽野 裕）

3. 出土遺物

（1）埴輪

埴輪は調査した各トレンチから出土しており、表採も含めて25点を図示した。くびれ部以外は大形の破片の出土は少なく、特に前方部のトレンチからは図示するような埴輪は出土しなかった。表採埴輪はいずれも角正治宅糞、後方部南側崖部付近で採集されたものである。出土した埴輪は、確認できうるかぎりでは円筒埴輪のみで、形象埴輪、朝顔形埴輪等と認められるものはない。円筒埴輪の各部名称については、基本的に『山岡田山古墳』（昭和62年、島根県教育委員会）で用いられたそれに準拠する。ただし、本古墳出土の埴輪は3段タガのものが大部分であるため、準用できない名称については円筒埴輪部分名称図によることとする。



第54図 円筒埴輪部分名称図

第7表 山代二子塚古墳出土埴輪觀察表

法 令 号 引 数	①②③④ ⑤⑥⑦⑧ (各1点)	外傷部の特徴	内部組織の特徴	筋膜筋膜の変化	筋 肉 筋 膜	備 考
S2 ②③④⑤ ①	1次整形ターナナメハ ク、剥離、2次調整コハ ク	ヨコナーナメハケ、剥離 部に2次剥離か、剥離 部近辺タバコ状のリガ グ	内面凹：ターナナメハク、 内面：剥離部に枚方向の凹 みをもつた複数	最大2mmの白色調粘膜を少々含む 内面：ターナナメハク（原発部）、上部：淡 紅色（原発部）	基底部ひずみあり	
④25.0以上	上端部：タバコ状タバコ マツリ、剥離：1次調整 ターナナメハク、2次調整コ ハク	ヨコナーナメハケ、剥離 部近辺タバコ状のリガ グ	—	地元2-3mmの白色調粘膜 内面：ターナナメハク、内面：淡 紅色（原発部）	口側部ひずみあり	
⑤31.1-31.6 ③40.7 ④44.7	口唇部、剥離：下方 タバコ状タバコマツリ、 剥離：半幅：タバコハク（1 次調整）	ナメハケ（2工程に分 かるか）	筋力弱の低いナメハクの調整、 剥離部は面を張るよう剥離	最大1mm程の白色調粘膜を含む 筋膜部：面張り（上端部）	口唇部はハタケ状變化 を呈する	
⑥37.7-38.5	剥離：2次調整コハクハ ク	剥離：下：鉛めの棒 の形となる複数。剥離部下 部：不明	筋力弱の板状タバコナメ ハク	筋膜 筋膜性 やや小品（上端部）	表面かなり風化	
⑦②22.6 ②17.8 ③47.4	上唇部：タバコ状タバコ マツリ、剥離：1次調整 タバココハク、下：不明	中段：ガ部分以上ナメ ハク、内面：タバコ状タ バコ状の剥離部	内面：板状（片）によるタバ コ状の凹み、内面：不明	白色調粘膜をわずかに含む 潤滑感 不正（下顎側）	表面氯化物らしい	
⑧④14.2-25.0	剥離：タバコ状タバコ マツリ（上方タバコには ならぬ）	ナデ、上：ナメハ ク	外因：タバコ状ハケ、内因： 筋力弱による筋力弱の凹 みと剥離部近辺はタバコ状	筋力1mm程の白色調粘膜を含む 筋膜部：面張り（下方）；内面：淡 紅色（下方は半幅）	基底部かなり赤がむ、 舌苔部（下方）は半幅から 左右3-5cmに及ぶくなる	
⑨②18.5	先端部により調整商を 消している	上唇部：板状剥離部 による	外因：ナメハク（タバコマ ツリ）、内面：ナメハクがナ デ	最大1mm程の白色調粘膜を含む 筋膜部：面張り（一部加温）	タガのやや上方で稜柱 状脱離される	
⑩②23.5	剥離：下方タバコ状タ バコマツリ	—	外因：タバコ状板状工具に によるタバコ、内因：筋力弱上 部によるタバコ状板状剥離部 と剥離部近辺はタバコ状	1mm程の白色調粘膜を含む（ 潤滑感）；（温）表面氯化物を呈す 且ビ（油温感）が粘膜（下方）	表面の白い粘膜をかなり 潤滑感（温）表面氯化物を呈す 且ビ（油温感）が粘膜（下方）	
⑪②28.5 ③1	口唇部、剥離：タバコハ ク、剥離方向ナデ	筋肉の外で、筋膜厚底	—	舌苔が多少多く含む 潤滑感 良好（上端部）	口唇部平滑面をなす。 口唇部1/4周残存	
⑫②34.2	ナメハケ	ヨコナーナメハケ	—	舌苔が多少多く含む 潤滑感 良好（舌苔部）	口唇部平滑面をなす。 口唇部1/4周残存	
⑬②38.2	ヨコナーナメハケ	ヨコナーナメハケ	—	舌苔が多少多く含む 潤滑感 良好（舌苔部）	口唇部1/4周残存	
⑭剥離大6 ②28.6	タバコハク（1次調 整）	ナデ→筋膜性	—	舌苔が多少多く含む 潤滑感 良好（十指間）	筋膜部1/4周残存	
⑮②41.7	—	—	内因：剥離部、ナデ	舌苔が多少多く含む 潤滑感 良好（上端部）	基底部1/4周残存	
⑯②49.8	タバコナメハケ（1次 調整）	ヨコタバコハケ、ナ デ部分以下剥離部ナ デ、ナメハクがナデナ デ	—	舌苔が多少多く含む 潤滑感 良好（十指間）	筋膜部以上1/4周残 存	
⑰②50.6	剥離：下方タバコ状タ バコマツリ	ナデ	—	最大2mmの白色調粘膜を含む 筋膜部：面張り（上端部） やや小品（上端部）	表面の一部風化	
⑱②50.6	剥離：1次調整タバコハ ク	剥離、剥離工具によるタ バコ状ナデ後コナデ	外因：剥離工具でタバコナメハ ク、内因：タバコ状板状工具	潤滑（温、通感）かなり含む 筋膜部：面張り（上端部） 良好（十指間）	基底部の一部に「タ グ」（ハメテ原体部のものによる）	
⑲②50.7	剥離：1次調整タバコハ ク	剥離、剥離工具によるタ バコ状ナデ後コナデ	外因：剥離工具でタバコナメハ ク、内因：タバコ状板状工具 向ナデ、内因：剥離工具によ るナデ、剥離部近辺はナデ	白色調粘膜を含む（さきな 温感）；（温）表面氯化物を 含む（十指間）	基底部に一部風化あり	
⑳②17.4	—	—	外因：ナメハクによるタ バコ状ナデ後コナデ	舌苔が多少多く含む 潤滑感 良好（上端部）		
㉑②50.9	黒化のため不明	ヨコナーナメハケ	—	舌苔が多少多く含む 潤滑感 良好（上端部）	口唇部1/4周残存	
㉒②50.6	剥離部上段：下方タバコ状 タバコマツリタバコマツリ、剥 離下段も同様	筋膜性、ナデ、ヨコナ ーナメハケ	筋膜性、ナデ、ヨコナ ーナメハケ	舌苔が多少多く含む 潤滑感 良好（十指間）	中段タバコ部1/4周残存	
㉓剥離 ㉔21.0	タバコハク（1次調 整）	ナデ、ヨコハケ	—	舌苔が多少多く含む 潤滑感 良好（十指間）	剥離部1/4周残存	
㉕剥離 ㉖21.5	タバコハク（1次調 整）	筋膜性、ナデ	—	舌苔が多少多く含む 潤滑感 良好（十指間）	タバコ部1/4周残存	
㉗②18.6	—	—	外因：タバコ状板状ナ デ、内因：タバコ状ナデ、下子 タバコ状ナデ向ナデ、筋膜 層厚：筋膜性	舌苔が多少多く含む、やや粗 糙感 良好（十指間）	基底部1/4周残存	
㉘②17.3	—	—	外因：タバコ状板状ナ デ、内因：タバコ状ナデ、筋膜 層厚：筋膜性	舌苔が多少多く含む 潤滑感 良好（温感）	基底部1/4周残存	

個々の埴輪の特徴については観察表に一括記すこととして、まずは本山墳出土埴輪の総体的特徴を列挙したい。

A. 形態的特長

- (a) 基本的に3段のタガを持ち、タガは概してよく突出する。
- (b) 全体形は、基底部から口縁部に向かってやや開く形態で、胴部には各段互い違いの位置に、対向方向2ヶ所の凸形スカシを設ける。

B. 調整の特徴

- (a) 外面1次調整はタテーナナメ方向のハケメを基本とする。
- (b) 2次調整は施すものとそうでないものが双方存す。
- (c) 基本的に底部調整を行っている。

C. 焼成の特徴

須恵質、土師質双方見られるが、黒斑が観察されるものはない。

ここでBの調整について若干詳しく述べてみたい。外面のハケメ調整を観察すると興味深い個体がいくらか見られる。胴部、口縁部のタテーナナメハケがその下方のタガを貼り付けたヨコナデをきり、上方のタガの貼り付けによりきられている個体がかなり認められるのである（第52図2、3、5、6、8、第53図7、12等）。すなわちこのハケメは、施行部の下のタガが貼り付けられた後に施され、さらにそのハケメが施行された後に上のタガが貼り付けられたことを意味する。このことは埴輪成形の際、一気に巻き上げられたのではなく、各段の積み上げごとにタガ貼り付け、ハケメ調整が行われたことを強く示唆するものといえよう。粘土紐の接合痕が、タガ部のやや上部に観察される例が多いのもこのことを傍証する。

また第52図7や第53図1の個体のように、（内）外面をきれいにナデて、1次調整を消しているものがあり注目される。

底部調整は、板状工具によるケズリに近いナデあげるような調整や指によるナデ調整を行うものと、ハケメによるものとの大きく2種類存在する。板状工具は、観察できるもので幅1.5~2cm前後と、比較的幅の狭いものを使用しているよう、板目と考えられる条線が見られるもの（第53図9、10等）もある。またハケメを施しているものでも、ハケメ前に板状工具による調整を行っていることが観察される個体もある（第52図1、4等）。底端部は、最終的にナデや指頭圧により調整を行うものが多く、底面を平滑にしようとする意志がうかがえるものの、切断を行っている個体は出土していない。また基底部外面の上半部がやや内湾（ヨコ方向のナデの結果か）して下半部との間に明確な変換点を持ち、下半部はタテ方向の板や指による調整を行う例（第52図3、第53図8、9、10）があり、外面調整に2つの段階を経ていることがうかがえる。

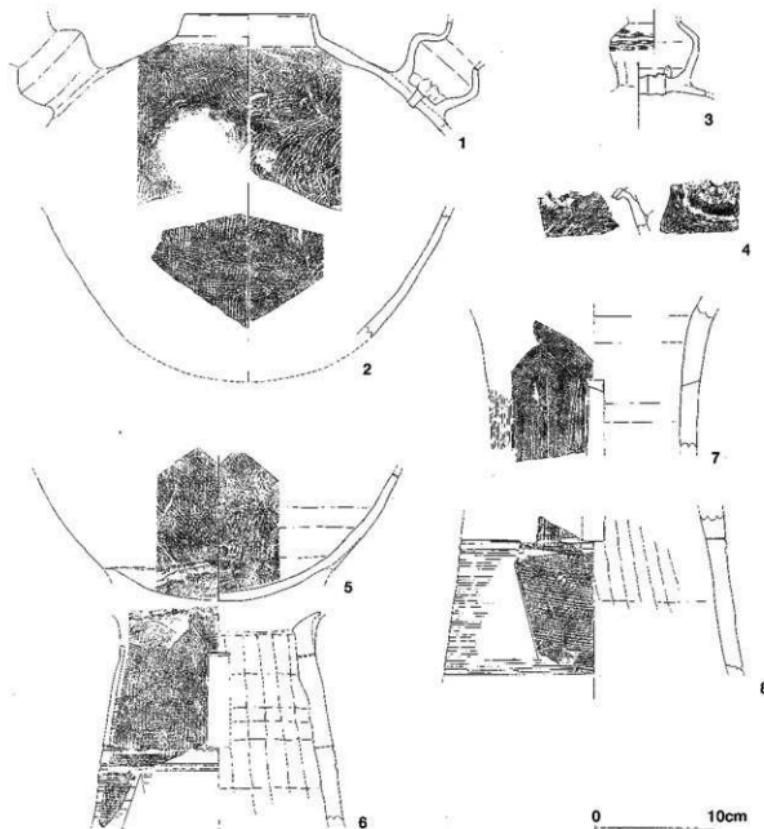
（丹羽野 榕）

（2）須恵器

第55図、56図、57図1~4、7~8は、須恵器子持ち壺の破片で、55図、56図はくびれ部トレチ、57図はその他のトレチで出土したものである。第55図1は口縁部から肩にかけての破片で、口縁部はやや内傾しながら直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。子壺は底部があるものを観察に接合しており、内側には幅1cm程の工具で刺突して接合した痕が認められ、接合後（焼成前）に径7cm程の孔を開けている。なお頸部付近に蓋をのせて重ね焼きしたと見られる痕跡（色変）が観

察され、蓋がセットになるものと考えられる。ちなみに蓋の径は14.2cmに復元される。2は小片で詳細は不明だが、底部に近い部分と考えられ、1と同一個体の可能性もある。3は子壺で、1と同様底部を持つものを接合後、穿孔している。外面肩には2条の浅い沈線を施し、その上にはカキメ状の条線が観察される。4は親壺の子壺を接合した部分の破片である。

5は親壺の底部である。外面は平行タタキ後ナデ、内面は同じ・円タタキ後ナデを施しており、丸底の底部に脚を貼り付けた痕が残っている。接合は外面部分だけに薄く粘土を延ばして貼り付けているため、きれいに全周はがれている。色調は暗青灰色～淡黒褐色を呈す。5は脚部の上半片である。親壺の接合部分から10cm程下に2条の浅い沈線を施し、その上方には5方向に長方形のスカシを、またその下には上段のスカシと互い違いに三角形のスカシを設けている。外面は平行



第55図 くびれ部トレンチ出土須恵器実測図(1) (S=1/4)

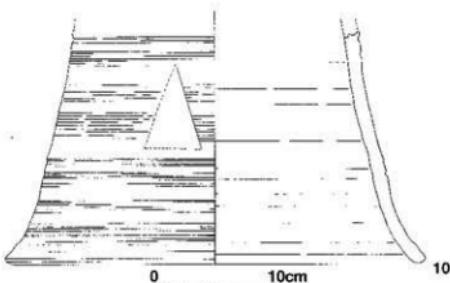
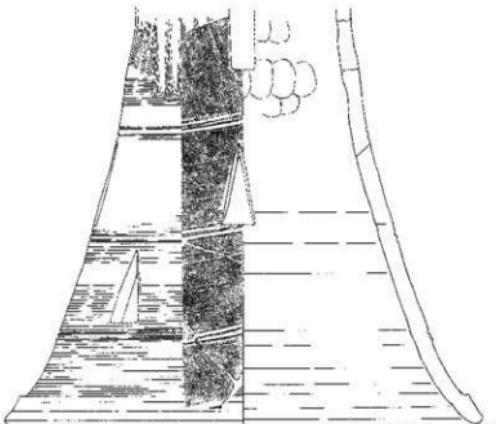
タタキ後ナデ、内面は縦方向のナデを施す。色調は青灰色を呈す。5と6は色調は異なるものの、接合部分の径や接合方法がまったく同様であり、同一個体の可能性がある。

7は脚部の線壺に近い部分の破片である。長方形のスカシ（数は不明）が見られ、外面はハケメ、内面は横方向のナデを施す。親壺の底がない個体か。8は脚部の中間部の破片である。2条の浅い沈線をはさんで、上方に第56図 くびれ部は平行タタキを施し長方形のスカシ、下方にはカキメを施し三角形のスカシを設ける。9は最上部分を欠くものの大形の脚部片である。下方に向かって次第に外方に開き脚端部は外面を肥厚させ段を設けており、外面は2条沈線で全体を4つの区画に分けている。最上段は平行タタキ後カキメ後ハケメと複雑な調整を行い、4方向に長方形のスカシを設ける。2段目はカキメの後にナデしており、上段と同じ位置に4方向にスカシを開ける。3段目はカキメを施し、上2段と互い違いの位置に4方向スカシを開けている。最下段はカキメのみでスカシはない。内面は最上段相当部には同心円タタキ後指頭圧痕、下半は回転ナデを施す。10も脚部だが、脚端部は丸く納めている。

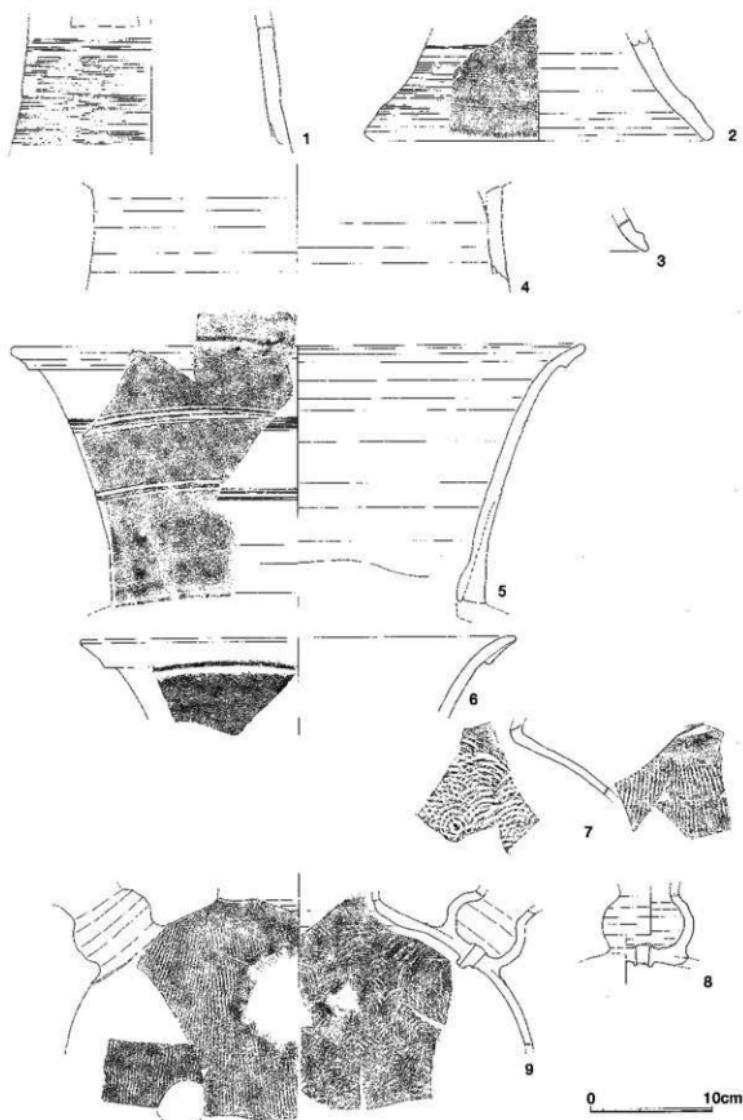
第57図1～4は脚部でいずれも小片である。4は、親壺の底部に接合する種類のものであろうが、他の個体と比べて径が大きい。8は子壺、9は親壺胴部から頭部にかけての破片で、基本的特徴は第55図1と同様である。頭部には蓋をのせて焼いた痕と思われる色変が見られ、胴部の最大径部付近に凹形のスカシが開く。この9と第55図1は、全形は不明であるが、形態が岡田山1号墳出土の子持ち壺とよく似ており、脚が付かないものである可能性もあり注意を要する。

6、7は壺の口縁～頸部片である。ともに口縁部は外面を肥厚させて段を設け、頸部には振幅の小さい描波状文を施す。

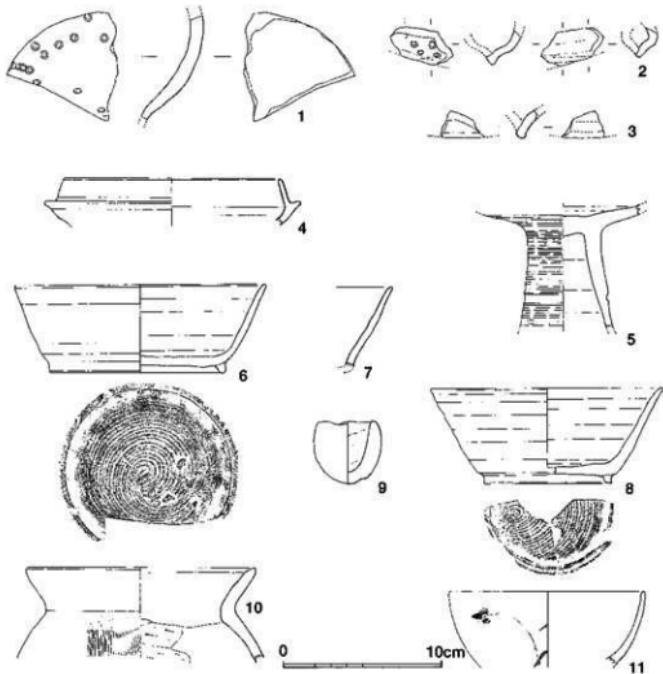
第58図1～3は3トレンチ出土の皮袋形土器の体部破片と考えられるものである。1は胴下半片、2、3は胴下端の接合部片で、2は両端に近い部分であろう。色調は淡褐色を呈し、調整はいずれも内面回転ナデとし、外面はナデで仕上げ、1、2に竹筋文が認められる。



第56図 くびれ部トレンチ出土須恵器実測図(2) (S=1/4)



第57図 1, 3, 4, 6トレンチ出土須恵器実測図 ($S=1/4$)
 (2・7…1トレンチ出土, 1・3…3トレンチ出土, 4~6…4トレンチ出土, 8・9…6トレンチ出土)



第58図 1~4トレンチくびれ部トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)
(7…1トレンチ出土, 1~3…3トレンチ出土, 4・6・11…4トレンチ出土, 5・8~10…くびれ部出土)

4は、杯または有蓋高杯の破片である。口縁はやや内傾して立ち上がり、立ち上がりの高さは1.5cmを測る。復元径が受け部で16cmと大形だが、小片であり不確定な数値である。5は高杯と思われる破片で、脚部は下方に向かってわずかに開き、外面には細かいカキメを施す。

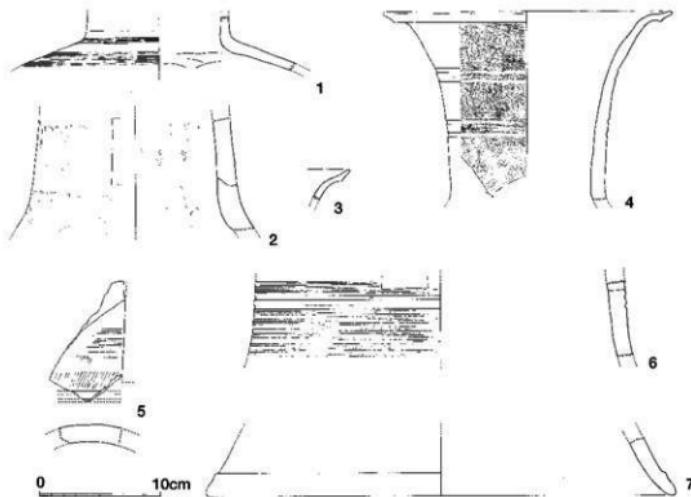
6~8は奈良時代前後の杯である。いずれも体部が底部からやや外方に向かって真っ直ぐのび、底部が確認できる。6、8には回転糸切り痕が残る。基本的に同時期のこれらの杯が6は4トレンチ、7は1トレンチ、8はくびれ部と各所で出土しており興味深い。

第59図は表採須恵器である。5は前方部先端中央の裾部、それ以外は角正治宅裏、すなわち後方部南側襟部付近で採集されたものである。4は壺の口縁部から頭部にかけての破片、それ以外は子持壺の破片と考えられる。1は、頸部から肩部にかけての破片、2、5、6は脚部片で透かし穴が認められる。7は脚端部の破片と考えられる。

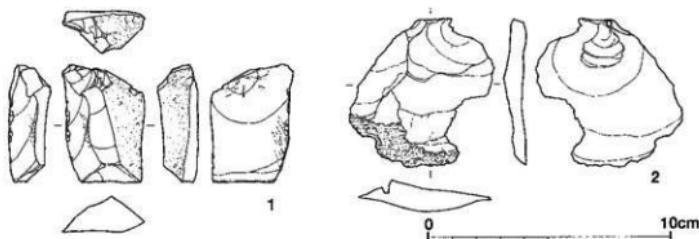
(鳥谷芳雄・丹羽野 裕)

(3) その他の遺物

土師器 第58図9はくびれ部から出土した手捏ね上器である。10はくびれ部出土の土師器甕で、外面には煤痕が残る。この9、10の時期の特定は難しいが、8の杯と近接して出土しており、奈良



第59図 表採須恵器実測図 (S=1/4)



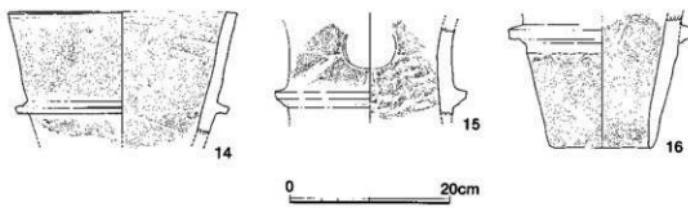
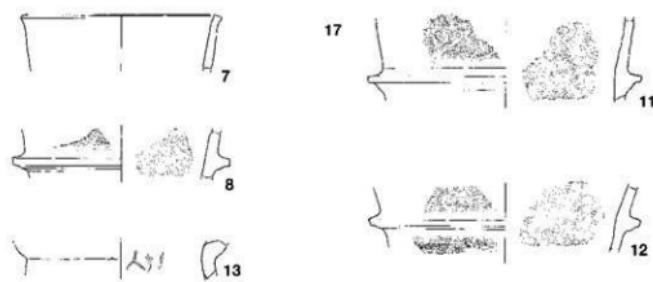
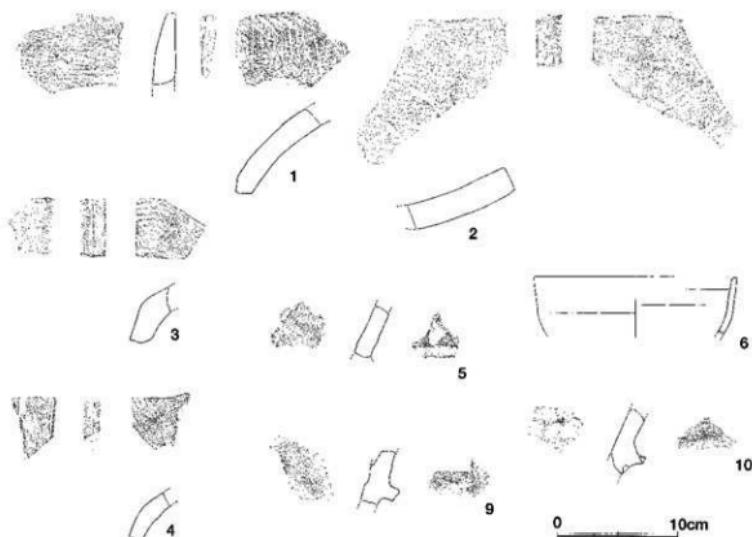
第60図 石器実測図 (S=1/2) (1・6トレンチ出土, 2・4トレンチ出土)

時代前後のものも可能性もある。

磁器 第58図11は4トレンチ1層出土の磁器碗である。白磁胎の体部外面に呉須で草花を描いている。時期等の詳細は不明だが、近世末～近代のものか。

石器 第60図1は黄褐色の緻密な石材の剥片である。自然面を大きく残す打面から剥ぎ取った比較的形の整った剥片で、背面には自然面とともに腹面と同方向の剥離面が数面見られる。やや分厚で両側縁には使用痕らしき微細な剥離痕が観察される。2は安山岩製の剥片である。全体に風化が著しいが、平坦打面から剥ぎ取られた不定形剥片である。背面には腹面と同方向の剥離面が数面見られ、底面には自然面も残る。これらはいずれも堀の流人土より出土しており、古墳の盛土内に含まれていたものであろう。これらの石器の時期は不明と言わざるを得ないが、剥離技術の特徴や風化度から旧石器時代にさかのばる可能性もある。

(丹羽野 裕)



第61図 出土遺物実測図 (1~6・9・10 : S=1/4、7・8・11~16 : S=1/6)

3. 出土遺物

(1) 墳輪(第61図)

7・8年の調査で出土した埴輪は、大部分が円筒埴輪で一点だけが形象埴輪か朝顔形埴輪の破片と思われる。5は2トレンチ、7~12が16トレンチ、14~16が15トレンチより出土している。円筒埴輪の部分名称については、「出雲岡田山古墳」(昭和62年、島根県教育委員会)に準拠し、前回の二子塚調査報告書と同様である。円筒埴輪は、いざれも破片のためタガの数とスカシの数が確認できるものは無かった。調整は外面1次調整がタテ~ナメ方向のハケメを基本とする。2次調整は施すものとそうでないものが認められる。焼成は第61図-9のみが須忠質で、あとは上師質である。5は外面にナメ方向のハケメ、内面はヨコ方向のハケメを施す。7は、口縁部の破片で推定の口径25cmを測る。14は口縁部から3段目のタガまでの破片であり、外面ともナメ方向のハケメを施している。8は、外面にナメ方向のハケメを施した後にタガを貼り付けヨコナデを行なっている。内面は、ナデを行っている。9は外面に横方向のハケメを施し、内面には指頭圧痕が残る。10は、外面にヨコナデを施し、内面には指によりタテ方向のナデを行う。11は外面の調整は風化のため不明で、内面には指頭圧痕が残る。12はヨコ方向のハケメの後に外面にヨコナデを、内面に指頭によるナデを行なう。15は第2段のタガと円形のスカシが残り内外面にナメ方向のハケメを施している。16は基底部の破片であり、外面にナメ方向のハケメを施し、底部調整は指によるナデを施している。13は、朝顔形埴輪の、円筒部から口縁部にかけてのくびれ部分の破片と思われる。調整は外面ともナデを施している。

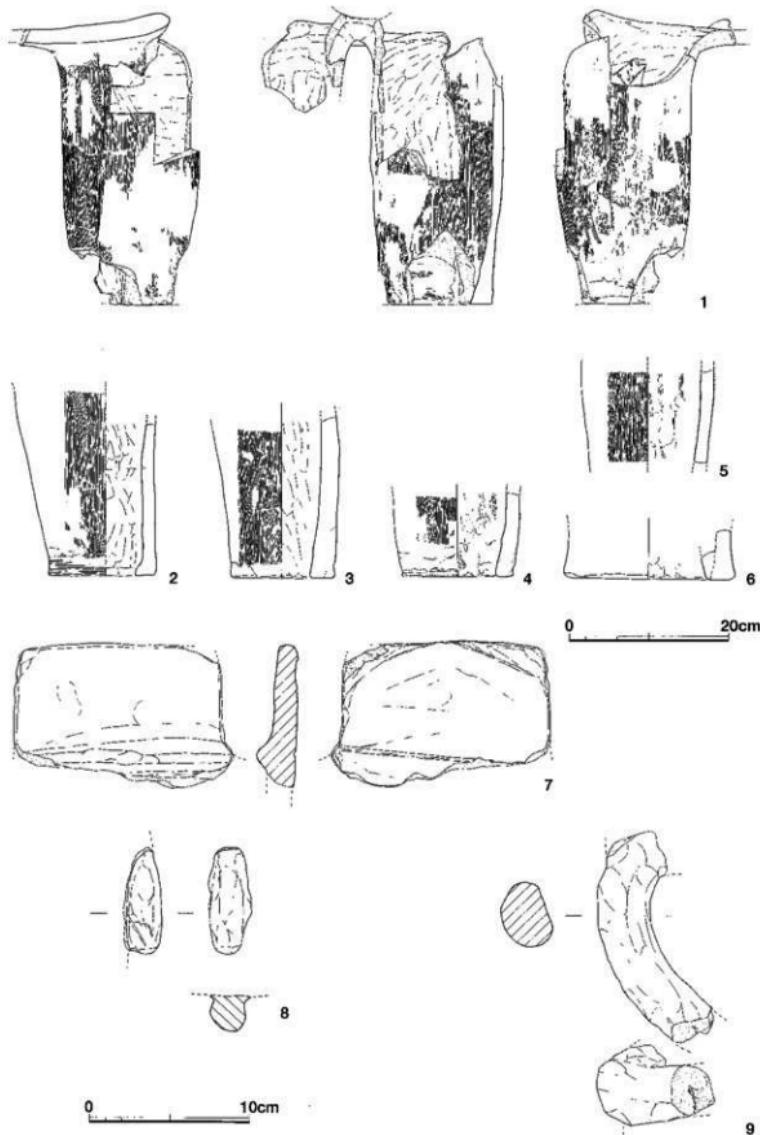
(2) 形象埴輪(第62図)

第62図に図示したものはいざれも後方部南側の中段テラスの14トレンチより出土したものである。1~5は動物の足と思われるものである。1は足から胴部にかけての破片であり、足の部分は殆ど残っている。胴に近い部分で直径16cm、基底部で13cmを測り若干細くなるが全体的に太く、短い印象である。調整は外面にタテ方向、基底部に横方向のハケメ、内面に横方向のナデを施している。胴部には円形のスカシがみられ、胸か尻と思われる。外面ともナデ調整を行なっている。2は、焼成、胎十から1と同一の個体の別の足と思われる。外面にタテ方向のハケメ、内面にナデを施す。基底部は台形状に広がり、底は平坦に仕上げられている。3は、他のものと比べると器壁がかなり厚く造られている。外面にタテ方向のハケメ、内面にナデを施している。4と5は同一個体で、動物の足と考えられる。外面にタテ方向のハケメを施し、基底部外面を板状工具により平坦に加工している。6は基部であり、1~5の動物の足とは異なる個体である。外面ともにナデが施されている。7は長さ13cm、幅8cm、厚さ1.3cmを測り、一方が欠けている。片面にタガ状の膨らみがみられ、その裏面には沈線と細かな突起状の膨らみがみられる。家形埴輪の軒状の部分の可能性がある。8は棒状の片面に接合の痕跡が残り、平坦になっている。人物埴輪のミズラのようなものと考えられる。9は径3cmから4cmの湾曲した棒状のものである。外面をナデしており、人物埴輪の上腕のようなものと推定される。

(広江 耕史)

須恵器(第61図、63図)

須恵器は、61-6が环で体部から口縁部にかけての破片である。外面ともヨコナデを施す。63-1から4は子持ち壺の破片である。1は親壺の底から脚部との接合部分である。外面にナデの痕跡が残る。2は脚部で上下2段に2条の沈線が巡り、三角形の透かしが二段開けられている。



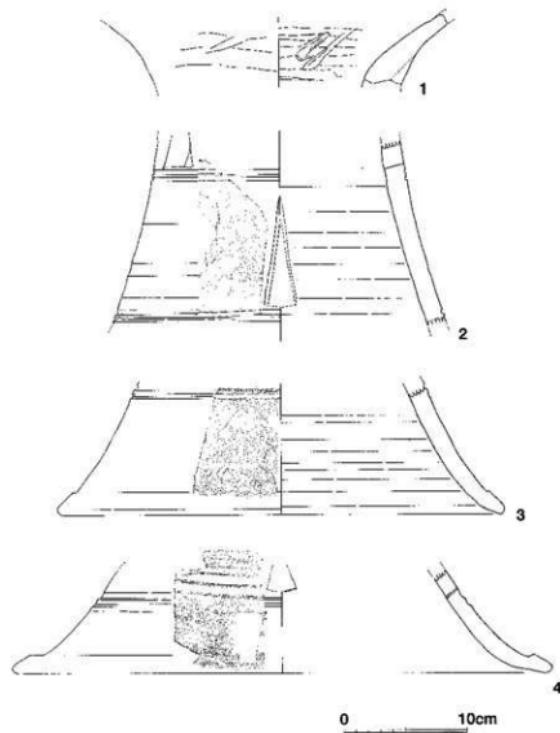
第62図 14トレンチ出土遺物(形象埴輪)実測図 (1~6:S=1/6、7~9:S=1/3)

3は脚端部で、裾が開き、端部をやや肥厚させている。4も脚端部で外面に沈線が2条巡り、三角形の透かしが開けられている。

瓦類(第61図)

瓦は、12トレンチ坑掘り中に、小片6点が出土しており、その内4点を図示した。

1は、丸瓦広端部の破片で、厚さ1.8cmを測る。凸面の広端部近くには糸引き痕をわずかに残すほか、平行タタキの痕跡をわずかにとどめている。凹面端部は深く削っている。側部は残りが悪いが、凹面の布目圧痕が、側面直前まで続いている事から分割面を調整していないものと思われる。広端部の形状から行基式丸瓦と考えられる。2は、焚斗瓦で、



第63図 15トレンチ出土遺物(須恵器)実測図(S=1/4)

厚さ2.2cmを測る。凹面には、布目圧痕を側面直前まで残し、凸面にはハナレ砂の使用が認められる。側部は、凹面側から約1/2の厚さまで刃物を入れ分割し、分割面を調整していない。淡褐色を呈し、酸化炎焼成され、やや軟質である。胎土中にガラス質の微砂粒を含む。通常の平瓦を2分割して熨斗瓦としたもので、元の平瓦は一枚造り成形に依るものと思われる。

3・4は丸瓦である。別個体であるが、同様のものと思われる。3は厚さ2cm、4は厚さ1.5cmを測る。いずれも凹面に布目圧痕を残し、非常に深い分割切面を持ち、分割面を調整していない。凸面のタタキは、同心円文に45°傾けた平行線文を組み合わせたもので、4のタタキは単位が小さいようである。いずれも胎土中にガラス質の微砂粒を含み、還元炎焼成されるが、4はやや軟質である。3は、黒褐色を、4は灰白色を呈す。玉縁式丸瓦と考えられ、3は丸瓦部、4は玉縁部と考えられる。

(林 建光)

4. ま と め

1. 墳丘形態について

(1)

今回の調査では、周辺部の補足測量と墳丘外における周溝等外部施設の確認調査を実施した。補足測量は、かつて島根大学が測量した時にはひどいブッシュのため不十分な図化しかできなかつた墳丘外北側の一部について、改めて全面伐採して補側したものである。別添図は両者を合成して製図した山代二子塚古墳現況測量図の決定版である。

周辺部の確認調査については、墳丘の東・北・西側に計8ヶ所のトレンチを設けて発掘した。壮大な古墳の規模に比べればほんの一端を調査したにすぎず、加えて、南側や北西側には民家があつて発掘できなかつた。そのため本来の墳丘形態を復元するという点からするとはなはだ不満足な調査とならざるをえなかつたが、ここで一応のまとめと問題点を記しておきたい。

(2)

8ヶ所のトレンチのうち、1・3・4・6の各トレンチでは見事な周溝が現われ、墳壠(周溝内側の下端)と周溝外側の立ち上がりが明瞭に確認された。周溝は地山の三瓶木次降下軽石層(SKP)を掘り込み、その下位にあるマンガンバンドの黒い固い平坦な面を溝底とするものである。ただ、北くびれ部の5トレンチ付近では、マンガンバンドの面が高すぎるため、さらにその下の大山松江降下軽石層(DMP)を掘り下げ、深く掘りすぎた部分には埋土をして溝底を整えたようである。

前方部前面の6トレンチでは、周溝外側の立ち上がりは地山だが、内側つまり墳壠は盛土の立ち上がりとなっており、他のトレンチと様相が異なっている。この部分では、一旦マンガンバンドの面まで下げたのち、前方部端を盛土で造成していることになる。また、北くびれ部の5トレンチでも前方部の墳端の一部は盛土をして整えている。本墳は基本的に地山を削り出したのち盛土して築かれていると考えられるが、細部の造成に当っては墳壠部にも各所で盛土がなされたことがうかがえる。

周溝内外の立ち上がりはきわめて急峻で、とくに後方部側では簡単には登れないほどの傾斜となっている。葺石は使用されていない。周溝内覆土の状況からみて、空堀(障)であったと考えてよい。後方部背面(東側)の周溝底面を基準にすると後方部頂の比高は約9m、前方部前面(西側)のそれを基準にすると前方部頂の比高は約7.5mとなる。

溝底のレベルは、自然地形ないしマンガンバンドのレベルに規定され、南東方が高く西に行くに従い低くなっている。溝底と周溝外堤との比高も現状では東ほど高い。後世の耕作・削平の影響も大きいと考えられるが、自然地形が西方ほど低くなっているので、西寄りつまり前方部側の周溝はもともと浅かったのかもしれない。溝底の幅は、次表に示したようにかなり多様である。但し、4トレンチ北側の周溝はすでにふれたように実際にはもう少し狭くなると予想される。

周溝外堤については1・3・6トレンチおよび2トレンチで調査を行ったが、いずれも盛土は認められず地山のままであった。しかし各所とも外堤の高まりの幅は20m前後と揃っており、とくに東側では明瞭な上堤状をなしている。後世の地形変化が著しいため確言はできないが、地山を削り出して整形した外堤帯が古墳の周囲を長方形にめぐっていた可能性を想定したい。

各トレンチにおける周溝と外堤（計測値は概数m）

トレンチ	溝底標高	溝底幅	外堤との比高	外堤幅(現状)
3	15.0	6.7	2.2	18
4 (東)	14.5	5	2.0	24
	(北)	14.5	9	—
1	14.3	6.9	1.7	15以上
5	14.1	—	—	—
6	13.3	4.5	0.5	22

(3)

第64図は各トレンチの所見をもとに、古墳の墳端、周溝外側の立ち上がり、そして外堤帯外縁の想定ラインを結んで、古墳の本来の形状を復元・想定したものである。但し、南側での調査がまったくできなかったので南半は現状の墳丘および北半との対称を考えて机上で作図したものであり、前方部についても、7および8トレンチで明確なデータが得られなかつたためやや不確実である。本墳の墳丘形態に關していくつか注意される点を述べると、一つは、現状の墳丘のみかけの主軸と周溝（少なくとも後方部の）のラインとが必ずしも直交・平行の関係にならないことである。つまり、前方後方墳の現状の墳丘と外郭が長方形をなすであろう周溝とが、整合した関係にならずに若干ずれていよいよみえるのである。これは島根大学の測量の折にも指摘されていた問題であるが、将来、墳丘そのものおよび南側における周溝の発掘調査を行うことができれば解決されるであろう。あるいは、局部的な変形に惑わされているだけなのかもしれない。

第二に、くびれ部が後方部側にややはいり込んで、後方部の前方部寄りコーナーが鋭角をなしていると考えられることである。

第三は5トレンチにみられた北くびれ部の特異な構造である。すでに詳述したように、墳丘築成後に、くびれに接する後方部側に、周溝の面から後方部頂上方向に登って行くの盛土がなされている。葬送行為に関連した付加施設である可能性を考えられよう。なお、今回の発掘で新たに判明した本墳の規模は次のようにある

墳丘全長	94m
後方部1辺（北辺）	56m
周溝を含めた全長	104m
外堤を含めた総長	約150m

(渡邊 貞幸)



第64図 山代ニ子塚古墳復元推定図 (S=1/1500)

2. 墓丘形態について

今回の調査では、平成2年、3年の前回調査箇所^⑩のトレンチと同様の場所と、前回調査の出来なかった南側民家の間にトレンチを設定した。また、県費調査として指定地内の中段テラス、後方部北側の墳丘からテラスにかけて調査している。民家側の調査で周溝を検出し、墳丘南側の位置を確認した。6ヶ所のトレンチのうち、11・16・17の各トレンチでは周溝を検出しており、16トレンチでは埴堀(周溝内側の下端)と周溝外側の立ち上がりを確認した。11・17トレンチは周溝外側の立ち上がりを検出している。16・17トレンチで検出した周溝は地山の三瓶木次降下軽石層(SKP)を掘り込み、溝底はマンガンバンドとなっている。11トレンチで検出した周溝は極めて浅く、前方部西側の周溝が南へ向けて浅くなっていくものと思われる。

周溝の立ち上がりは確認可能なもので、16トレンチの埴堀側と17トレンチの外側がかなり急なものである。葺石は確認していない。周溝内で遺物が出土しているのは、16トレンチから埴輪片が出土するだけで明瞭な遺物は確認していない。周溝内の覆土堆積状況から、空掘りであったと考えられる。史跡指定地内の15トレンチでは、二次墳丘の斜面に葺石がみられ、南側テラスの14トレンチにおいても同様に墳丘斜面に葺石が確認されていることから、二次墳丘の全面に葺石がされていた

と考えられる。敷かれた土は人頭大のものを中心にやや小ぶりのものも含まれる。後方部の盛り土の観察から表土の高さとテラスの高さが同一であり、テラスより上部の二次埴丘が周溝を掘り下げた上により盛り上され、その斜面を保護するために葺石がされたものと思われる。盛り上の十層の観察によれば、(1) 黒ボクの表土の上に黒ボクと地山のブロックをかなり細かく碎いて混入した土を全面に敷き、(2) その後に埴丘の南側を土手状に盛り土を行った後、主体部側を盛り、(3) 埋丘の中程で一端平坦に整地する様に盛り、主体部上に黄色土を厚く盛り上げ、(4) 最後に黄色土と黒色土を交互に盛り、埴丘を整えている。黄色土と黒色土の互層状になる部分から、黒色土は盛り土の際、一回に運搬する単位が表れている。黒色土は、運んだ際に山状の形を残すことから平坦に整地することなく盛られていたようである。逆に黄色土はその凹凸を埋める様にしながら盛られたようである。

14トレンチにおいて確認された中段のテラスから形象埴輪の馬、人物、家の破片が出土しており、この場所に置かれていたものと思われる。15トレンチの場所は、主体部の北側にあたるが、トレンチ内では主体部の入り口等は確認されなかった。

後方部南側16トレンチの溝底と後方部埴頂の比高差は9.3m、17トレンチの溝底と後方部埴頂の比高差は9.5mを測る。周溝底の標高は後方部の東側から西側に向けて傾斜している。前方部の西側は本来の地形が傾斜しているために、周溝が浅くなっている。

周溝外堤は、9トレンチで調査を行なった。耕作土の下が地山となっており、盛り土は認められなかった。地山は、三瓶木次降下輕石層である。この部分での周溝との比高差は2.0mを測り、外堤の幅は約20mである。今回の調査で確認した周溝の位置からは、埴丘全長94m、周溝を含めた全長104m、外堤を含めた総長約150mの規模を変更する要素は確認されなかった。今回の調査で初めて確認された後方部南側の周溝立ち上がりから、後方部南北の幅53mを確認している。

3. 出土遺物について

(1) 円筒埴輪

円筒埴輪は量の多寡を問わねば2ヶ年にわたって調査した8ヶ所の調査区すべてから出土している。のことから、山代二子塚古墳は、少なくとも段平垣面の全周に連続して円筒埴輪が樹立していた可能性が高いといえる。また各調査区の出土量と埴丘測量図を引き比べてみると、段平垣面が明瞭に観察できない前方部北側に近いくびれ部トレンチで多量に出土し、段平垣面が明瞭に観察できる後方部北側や前方部西側の下方に設定した1トレンチ、6トレンチでは少量しか出土していない。このことは現地表の観察により残りがよいと判断される部分については、埴輪も現位置を保つて遺存している可能性が高いことを示しているといえよう。それは取りも直さずこの古墳の保存状況が良好であることの証左でもある。

さて本古墳出土の円筒埴輪の編年の位置であるが、出土した埴輪は古墳全体から見ればわずかの割合でしかなく、古墳の時期決定を行うだけの十分な量とはいえないが、大雑把な把握は可能と思われる。編年の示準としては、出雲地方ではタガの形態や調整のあり方は、新しい時期まで古相の特徴が残存することが知られており^④比較的変化の追いやすい底部調整を取り上げたい。

さて現在のところ、この周辺で底部調整が施された埴輪を持つ古墳でもっとも古いと考えられるのは古曾志大谷1号墳である。この大谷1号墳出土埴輪の底部調整の特徴は、倒立した状態で内外

面にハケメを施し、さらに底端部を工具で平滑に切り取っていることである⁽²⁾。同様の特徴を持つ埴輪は、本古墳の近辺の向山西2号墳にも認められる⁽³⁾。これらの古墳の時期は大谷1号墳はおよそ5世紀末頃、向山西2号墳は山陰須恵器編年Ⅱ期といわれている。これらと山代二子塚古墳出土埴輪を比べると、ハケメ調整は施している個体は見られるものの、底端部の切取りはまったく見られない。底部調整が簡略化、省力化の方向に向かって変化するとするならば、本古墳出土の埴輪は明らかに大谷1号墳、向山西2号墳出土埴輪より新しいものといえる。

ところで新しい時期で埴輪を持つ古墳で比較的様相が明らかになっている古墳としては松江市大庭町岡田山1号墳があげられる。この岡田山1号墳出土埴輪の底部調整は、指や板によるナデ、オサエによるものが主流⁽⁴⁾でハケメを施すものはほとんど認められない。岡田山1号墳の時期については様々な意見があるものの、およそ6世紀後半で大過ないものと思われる。一方それに比して二子塚古墳の埴輪の場合、底部調整にハケメを施すものがかなり認められ、また底端部を最終的にナデ等で調整して面を捕える意図がうかがえるなど、古い特徴を残しているといえる。

以上のように、円筒埴輪から見ると山代二子塚古墳は向山西2号墳よりは新しく、岡田山1号墳よりは新しい時期ということはいえそうである。これは渡辺貞幸氏からて採集資料を元に示された6世紀中葉～後葉という年代観⁽⁵⁾と矛盾しないものといえる。

(2) 須恵器子持壺

子持壺は、今回の調査で後方部東側、北側、南側（表探）、くびれ部、前方部西側と、古墳の全域で出土している。こうした出土状況から、子持壺は埴丘のほぼ全域で使用された可能性があり、またくびれ部では円筒埴輪と同様の流れ落ち方を呈していたことからも、その使用方法が埴輪ときわめて近いものであったことが想定される。これは1988年に調査された團原古墳の状況⁽⁶⁾からも明らかで、他の子持壺を出土する古墳の多くが埴丘やその埴縁周辺から採取されることからも首肯されよう。

ところでこれらの子持壺の特徴からどのような編年的位置が与えられるであろうか。今回の調査では全形復元ができるものがなく、また必ずしも全個体が共通の特徴を持つわけではないので、微細な検討はできないが、大局的な位置付けを若干考えてみたい。

まずこの近くの松江市山代町團原古墳出土の子持壺⁽⁷⁾と比較すると、團原古墳のそれは既に体部（親壺）の胴の張りが少なくなるとともに、脚部の調整やおさめ方もかなり退化しており、本古墳出土のものが明らかに古相といえる。團原古墳からは山陰須恵器編年Ⅲ～Ⅳ期の須恵器が出土していることから、実年代としては6世紀末～7世紀初頭で大過ないと考えられる。

次にこの種の子持壺で古いものと考えられる庵島町向山古墳⁽⁸⁾、松江市法吉町岡田薬師古墳⁽⁹⁾のそれと比較してみると、全体のプロポーションはいずれも体部がよく張り、脚部が次第に幅広がりになっていく点などは同様で、基本的に大差ない時期のようである。しかし細かく見ると、向山古墳のものは、子壺がより頸部に近い位置に付き、子壺口縁が他の2者より水平に近い形になっている上、脚部には細かく櫛描波状文を施すなど、若古い要素が見受けられる。ちなみに、向山古墳は山陰須恵器編年Ⅱ期、岡田薬師古墳は6世紀中葉～後葉の時期が想定されている。

一方本墳からは、親壺の底がある脚付き子持壺が出土しており（第55図5、6）注目される。出雲地方の盛行期の子持壺は、親壺の底がないものが大部分で、同様の形態が他の地方にきわめて稀

なことから「出雲型子持壺」と名づけられている⁽³⁾が、その系譜については明らかではなかった。こうした脚付きの子持壺が、器台のうえに臺を乗せた形が変化して成立したものである⁽⁴⁾ならば、丸底の臺に脚を取りつけたこの底のある個体が「出雲型子持壺」の祖形である可能性もある。そうであるならば、前に述べた編年観も若干さかのぼらせる必要があるかも知れない。

以上のようなことや、岡田山1号墳で見られるような脚の付かない子持壺が併存している可能性があることなど、山代二子塚古墳は子持壺のあり方や系譜、編年を探る上で重要な鍵を握るものであり、今後のさらなる調査が期待される。

(丹羽野 裕)

(3) 皮袋形土器

今回の出土遺物の中に数点の皮袋形土器片が含まれていたことは既に述べたとおりである。島根県下では、皮袋形土器がかつて同じ風土記の丘地内にある岩屋後古墳で出土⁽⁵⁾したのに次いで2例目の発見となった。

皮袋形土器は、円錐台形を偏平に押し潰して下端部を閉じ合わせた体部と、その上部に接合した口頭部からなる器形のもので（なかに向肩に把手を伴うことがある）、体部の片面に突帯、刻み目、竹管文が施されている。管見ではこの種のものには大きく2つのタイプがあるよう、突帯を有するものとそうでないものとが認められる⁽⁶⁾。県下出土の2例についてみると、ほぼ完形品が出土した岩屋後古墳では、突帯を巡らしたうえで規則性にかける竹管文が施されており、タイプとしては前者に属するものである。一方、本古墳出土の破片には竹管文のみ認められて突帯がないが、小片であるためどちらのタイプになるかは今の段階では明らかにしがたい。ただ、外面調整や竹管文の施文の状態からすると、本古墳のものが岩屋後古墳のものに比べ、より丁寧である。これまでのところ皮袋形土器について言及した文献は極めて少ない。田辺昭一氏⁽⁷⁾は用途を「葬祭用」としたうえで、その消長期間は同氏が作成した須恵器年表中の「II期の終末からIII期初頭」にかけた時期に比較的限定されるとしている⁽⁸⁾。今回の調査のまとめでは、本古墳の築造年代をこれまでの知見や他の出土遺物などから推しておよそ6世紀中葉前後と見なしたが、この年代観が皮袋形土器にも当てはまるとなると、田辺氏のそれと少し矛盾を来すことになろう。また、岩屋後古墳の場合でも、報告者は伴出した須恵器類を6世紀後半頃とみて、これらと皮袋形土器との間には大きな時期差はないものとしている。果たして田辺氏の皮袋形土器に関する年代観が妥当であるか否か、少し検討の余地（出現の時期を少し遡って考えてみてはどうか）がありそうである。

また、逆にこれが正しいとなれば、皮袋形土器の使用と現在想定している本古墳の築造年代との間には時間的なズレが生ずることになるが、この開きをどのように理解するかが問題となろう。その場合、皮袋形土器は古墳の築造後しばらくしてから葬祭用に供献されたと考えることも可能となり、であれば本古墳における築造後の祭祀の存在といった面からも検討してみる必要があるように思われる。⁽⁹⁾

なお、現時点では中国地方における皮袋形土器の出土分布をみると、事例の意外と少ないことが知られる⁽¹⁰⁾。すなわち、本県出雲地方の2例を除けば、岡山県下に2例（山陽町岩田第6号墳⁽¹¹⁾、岡山市津寺遺跡⁽¹²⁾）、広島県下に1例（広島市惣出古墳⁽¹³⁾）があるのみで、残る鳥取・山口両県下では今のところ皆無の状態である。このような状況からすると、皮袋形土器は葬祭用土器のなかでも稀な器種ということができるが、そうした中にあって出雲地方での出土数は今後増える可能性を

もっているように思われ、今後この地方(特に東部地域)における皮袋形土器の出土を注目してみたいところである。

(鳥谷 芳雄)

(4) 小 結

以上述べたような遺物の年代観から、古墳の築造時期について考えてみたい。埴輪、子持壺の型式からすると、およそ山陰須恵器編年Ⅱ期の須恵器を出土する古墳よりは新しく、Ⅲ期でも新相を示す須恵器を持つ古墳よりは古いという位置づけが可能である。一方今回の調査で出土したその他の須恵器で、時期の判定がしうる資料として环身(第58図4)がある。小片で径は不正確としても、比較的長く立ち上る口縁部の特徴から山陰須恵器編年ではⅢ期でも古相を示すもの(陶邑TK10併行か)といえる。もちろん須恵器が築造時のものかどうかは不明で、下限を示す資料と言えよう。

以上の点からみて、山代二子塚古墳の時期は山陰須恵器編年のⅡ期新～Ⅲ期古段階とみて大過ないものと考えられる。あえて実年代を言えば、6世紀中葉を前後する時期であろうか。

(鳥谷 芳雄・丹羽野 裕・渡邊 貞幸)

註

- (1) 井上寛光「出雲の円筒埴輪」「松江考古」5 1983
- (2) 島根県教育委員会『古曾志遺跡群発掘調査報告書』1989
- (3) 長嶺康典・昌子寛光「円筒埴輪の検討」「出雲岡田山古墳」島根県教育委員会 1987
- (4) 渡邊貞幸『松江市山代二子塚古墳をめぐる諸問題』『山陰文化研究紀要』23 1983
- (5) 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書』VI 1989
- (6) 鹿角町教育委員会『講武地区遺跡分布調査報告書』2 1988
- (7) 島根県教育委員会『岡田菜師古墳』1986
- (8) 昌子寛光「出雲の子持壺」「古文化談叢』18 1987
- (9) 岸本雅敏「装飾付須恵器と首長墓」「考古学研究』85 1975
- (10) 横山純夫ほか『岩屋後古墳発掘調査概報』島根県教育委員会 1978
- (11) この二つのタイプは、前者にも後者にも共通して、さらに刻み日のあるものと竹管文のあるものとに2分できそうである。
- (12) 川辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981。なお、氏はこの形態のものを皮袋形瓶と呼んでいる。
- (13) この時期は、年表では陶邑窯のTK-209から同一-217期に該当し、実年代で言えば7世紀初頭(6世紀末を含むか)から同前葉にかけての頃に相当するものとみられる。
- (14) この点は、今後子持壺など本古墳に伴うと思われる採集・出土遺物のすべてについてトータルに検討されるべき課題であろう。
- (15) 神原英期ほか『岡山県吉山陽新庄宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』(6)、『岩田古墳群』岡山県吉山陽町教育委員会 1976。椿真治氏の教示による。
- (16) 岡山県教育委員会が実施した山陽自動車道関連発掘調査より出土、未報告。津寺遺跡は集中落跡で、出土した皮袋形土器は上層器6世紀終わり頃の土器が伴出しているという。椿真治氏の教示による。

- (17) 福井万千広島市惣田古墳出土の皮袋形土器』『みよし風土記の丘』No.5 みよし風土記の丘
友の会 1981。妹尾周三氏の教示による。なお、福井氏はこの土器の時期について7世紀前半頃のものと推定されているが、妹尾氏によると6世紀後半頃の可能性があるという。
- (18) ちなみに、田辺氏の先の文献には皮袋形土器について「特殊な器形の須恵器の中では最も広い分布範囲をもち、その量も多い。分布範囲は東海以西の西日本全域に及ぶ」との記述がみられる。

4. 出土遺物について（6・7年度調査）

(1) 円筒埴輪

円筒埴輪は、ほとんどが16トレンチから出土している。16トレンチは後方部南側の周溝部分に設定したものであり、埴輪は中段テラスから流れ込んだものである。平成7年度の県費調査では中段テラス（14トレンチ）に調査区を設定しているが、この場所では円筒埴輪が樹立した状態は確認していない。以前からこの付近では多くの埴輪片が採集されており、かなり破壊を受けている可能性が強い。

円筒埴輪は、口縁部が1点のみで、他はタガの部分である。底部の破片は無く、底部調整の有無は確認不可能で時期の判断が困難であった。埴輪のタガの形態とハケメ調整は、前回の平成2、3年の調査⁽²⁾で出土したものと同様のものであり、向山2号墳⁽³⁾より新しく、岡田山1号墳⁽⁴⁾より古い時期、6世紀中葉～後葉という年代が考えられており、その時期を変える材料はみられない。朝顔形埴輪と思われる破片は、1点出土している。今までの調査出土品、表採品も含めて朝顔形埴輪は出土していないので初例となる。

(2) 形象埴輪

中段のテラスより出土した形象埴輪は、馬、人物、家形と考えられる。島根県内で馬・動物形埴輪を持つ古墳としては、風土記の丘周辺に集中しており、井ノ奥4号墳、石屋古墳、東瀬寺古墳、岩屋後古墳があり、松江市北部の塚山古墳、仁多郡仁多町常楽寺古墳がある。埴輪窯跡出土の資料として、平所遺跡がある。二子塚古墳出土の馬形埴輪の足には蹄の表現が見られず、平所遺跡のものより後出的な要素と考えられる。しかし、馬形の埴輪が資料的に少ないと、形態的にも判別可能なものが少ないとから、現在のところ時代を特定するのは困難である。馬形埴輪の出土する古墳は山代二子塚古墳をはじめとして、首長墓と考えられるものが多く見られる。

(3) 瓦類

いずれも小片であるため、時期の言及はしがたい。1については、残りが悪いため、不明な点が多いが、平行タキを使用している点は注意を要する。2は、一枚造り平瓦を2分割し、分割面を調整しない。凸面にハナレ砂を使用している点で出雲国分寺跡、中竹矢遺跡などの出土瓦と共通点があり、8世紀後半から9世紀の所産であろう。3・4の類例は、県内では広瀬町の畠田城跡菅谷地区⁽⁵⁾から朝鮮系と呼ばれる水切り瓦などと共に出土しており、共伴した陶磁器類は16世紀代の所産と考えられている。九州でも類例が知られており、長崎県巌原町（対馬）の金石城跡⁽⁶⁾での考察によれば、朝鮮半島の瓦匠が対馬で製作したと考えられている。年代的には高麗期のもので、文明年

間（1470年頃）に復興された対馬国分寺に使用されたと推定されている。

（3）小 結

今回の調査の結果からは、山代二子塚古墳の規模について、前回（平成2・3）の調査の結果を見直す材料は無く、規模については変更する要素はみられない。古墳の築造については、調査ではなく整備に伴い上層展示施設を設けたことで、後方部の盛り土の様子が観察可能となった。それにより墳丘の2段目がすべて盛り上により構築されたこと、盛り土の順序や葺石の存在が判明した。盛り上の方法は出雲市の大念寺古墳にも共通するものがあることも確認された。

古墳の築造時期については、今回調査により出土した遺物が円筒埴輪、形象埴輪、子持ち壺の破片数点であり、時期を判断する材料に乏しいが、前回の調査報告で考えられた時期を外れるものは出土していない。山代二子塚古墳の時期は山陰須恵器編年Ⅱ期新～Ⅲ期古段階と考えられる。

山代二子塚古墳の含まれる、山代大庭古墳群は意宇郡の首長墓としてとらえられている。二子塚はその中でも全長94mを囲む大規模な前方後方墳で、旧出雲国において出雲市大念寺古墳と対峙してとらえられている。史跡ということでその主体部の詳細については不明であり、現時点で判断可能な材料に制約はあるものの、規模や形象埴輪の存在などから十分首長墓として捉えて遜色はないものと思われる。

（広江 耕史）

註

- (1) 島根県教育委員会『風上記の丘地内遺跡発掘調査報告』Ⅶ 1992
- (2) 註1に同じ
- (3) 井上寛光「出雲の円筒埴輪」「松江考古」5 1983
- (4) 長嶋康典・昌子寛光「円筒埴輪の検討」「出雲岡田山古墳」島根県教育委員会 1987
- (5) 「史跡常田城跡 菅谷地区 第1次発掘調査概報」広瀬町教育委員会 1985年
内田律雄「能義郡広瀬町内出土古瓦」「松江考古6号」松江考古学談話会 1985年
木戸雅寿・林健亮「富田城跡」「織豊期城郭の瓦」織豊期城郭研究会 1994年
- (6) 『金石城緊急発掘調査報告書』長崎県教育委員会 1977年
「金石城」巌原町教育委員会 1985年
中井均「金石城跡」「織豊期城郭の瓦」織豊期城郭研究会 1994年

第7章 おわりに

平成4年度の発掘調査から始まった山代二子塚古墳の整備は、土地買上を経て、平成8年度からの土層見学施設、ガイダンス「山代の郷」の建設と古墳周辺の整備をもって、一応の完成をみたところである。しかし、前方部の周濠と外堤の一部に民家があり、古墳全体の整備ができていなく、残された問題や課題も存在する。今後の整備計画や管理の参考として、幾つかを挙げておきたい。

1. 古墳整備にかかる事項

- ①用地確保の関係で制約のあるなかでの整備となっているため、墳丘整備には問題があり、将来的には本来の墳丘を復元できるような整備をすべきであり、大きな課題である。
- ②古墳の北側は、当初計画の通り、土層見学施設とガイダンスをつなぐ園路を前方部の周囲に廻らせ、利便性を高めるのが望ましいが、用地の関係で従来の里道を利用し、上り下りするに留まっている。
- ③古墳全域の整備、復元を目指すことになると、墳丘などの発掘調査を行った後、周濠の上を含めて、盛り土を行うこととなる。それによって、前方部と後方部のアンバランス、とりわけ墳丘のくびれ部の、段差を含めた違和感を解消できるはずである。しかし、これも民家に接しているため、実現は困難な情勢にある。

2. 管理上の事項

- ①土層見学施設は、古墳の上層が直接見ることができるように、断面を露出させているので、壁面にカビが生えたり、剥落しないよう、定期的に養生する必要がある。
 - ②芝や植栽の手入れと墳丘の草刈り等にも努める。
 - ③住宅に直に接している関係から、迷惑をかけないよう平素からの周到な配慮を要する。
 - ④ガイダンスの映像や展示室の視聴覚器材のソフトも、できる範囲で新たなものと取り替え、興味をもたれる場となるよう努める。
- 最後に、この山代二子塚古墳が八雲立つ風土記の丘の主要な史跡として活用されるとともに、古代を考えるよすがとして愛され続け、周辺の古墳や遺跡および茶臼山のガイダンスの拠点となってくれることを願っている。

この事業を進めるにあたり土地所有者の方々および地元山代原地区の皆さんには、ご理解とご協力をいただきましたことに心から感謝申し上げます。

(西尾 克己)



八雲立つ風土記の丘空中写真（矢印が山代二子塚古墳）1974年頃撮影

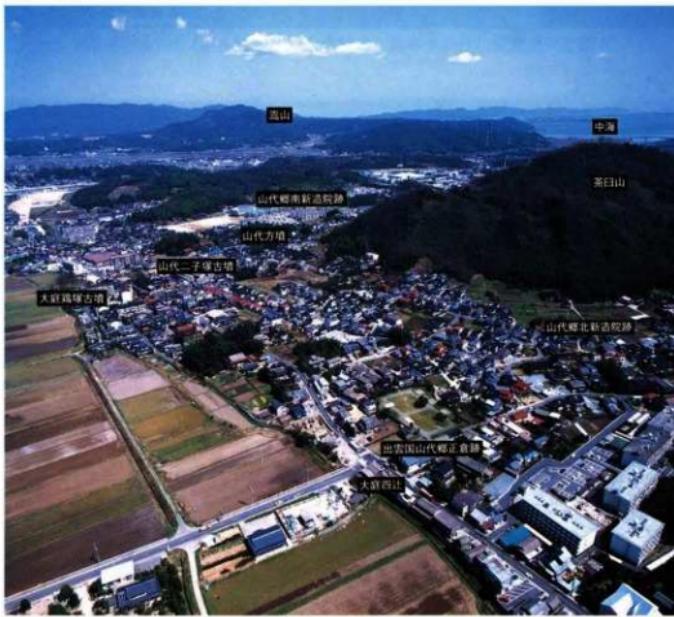


山代二子塚古墳（東南上空から）1981年撮影

図版 2



山代ニ子塚古墳全景（南西から）



山代ニ子塚古墳と周辺の遺跡



整備前全景（西から）



土層展示室完成時（西から）

図版 4



1 トレンチ（北から）



1 トレンチ（南から）



1 トレンチ（西から）

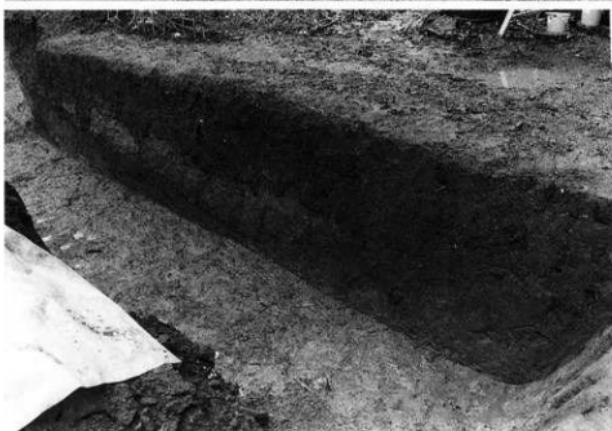
1 トレンチ西壁
周溝内土層堆積状況



2 トレンチ（北から）



3 トレンチ南壁
周溝内土層堆積状況



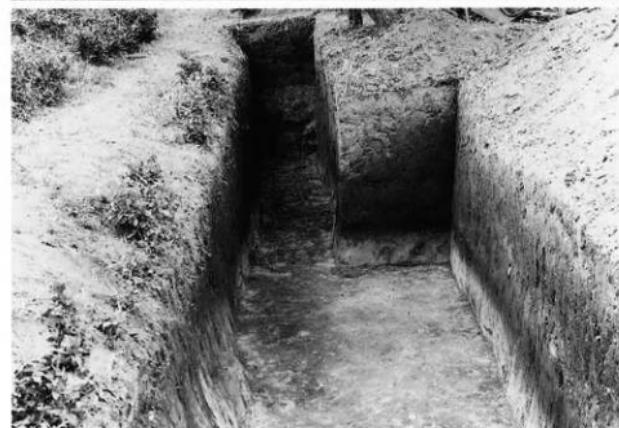
図版 6



4 トレンチ（西から）
周溝東側立ち上がり



4 トレンチ（南から）
墳丘立ち上がりと西壁土層



4 トレンチ（西南から）
最奥部周溝北側立ち上がり

4 トレンチ南壁
周溝内土層堆積状況



6 トレンチ南壁（西から）



6 トレンチ南壁（西から）
外堤調査状況



図版 8



6 トレンチ

墳丘盛土の状況

7 トレンチ（西から）



8 トレンチ（南から）



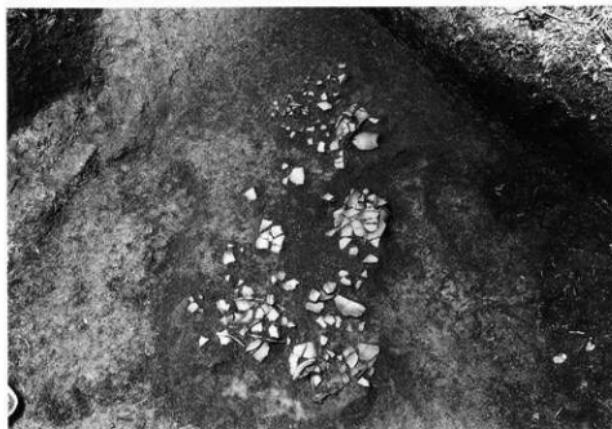
くびれ部トレンチ
(5トレンチ)
スロープ状盛土 土層断面
(1サブトレンチ南壁)



くびれ部トレンチ
填丘盛土とスロープ状盛土
(2サブトレンチ東壁)



くびれ部トレンチ
スロープ状盛土上遺物出土
状況



図版 10



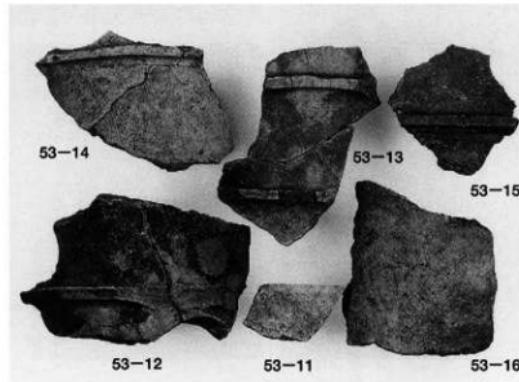
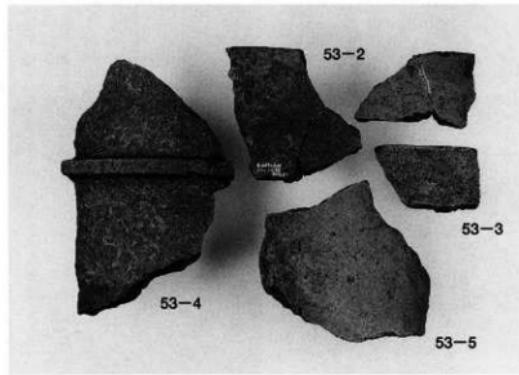
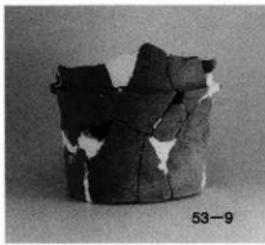
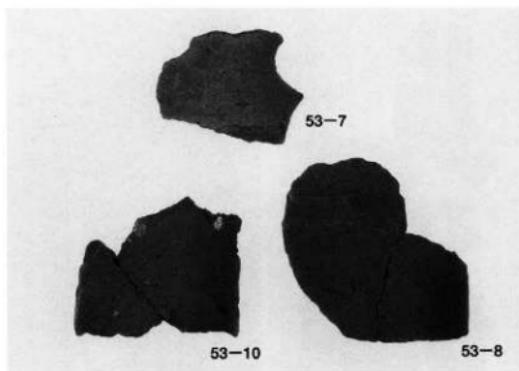
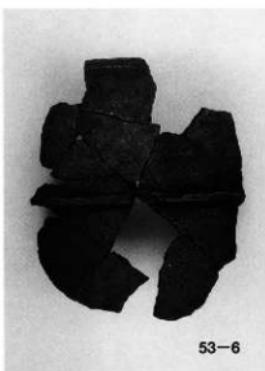
くびれ部トレーンチ
(5トレーンチ)
スロープ状盛土検出状況



くびれ部トレーンチ東壁
土層断面



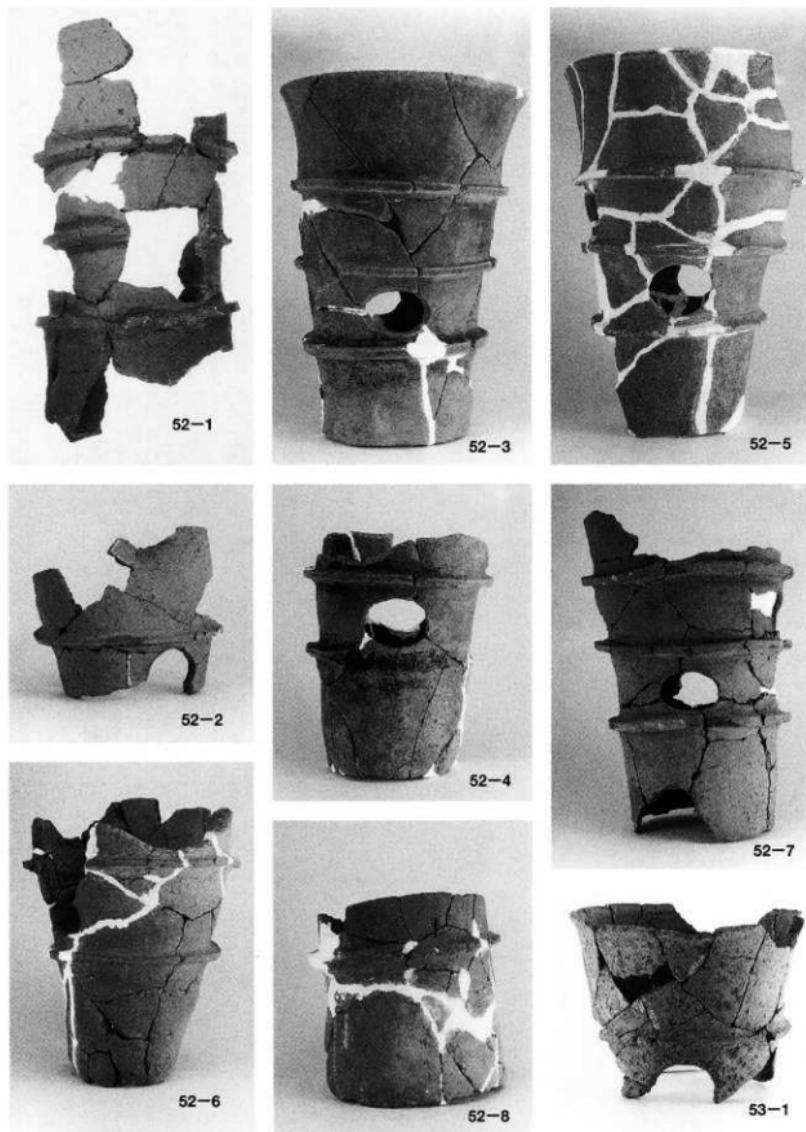
くびれ部トレーンチ南壁
土層断面



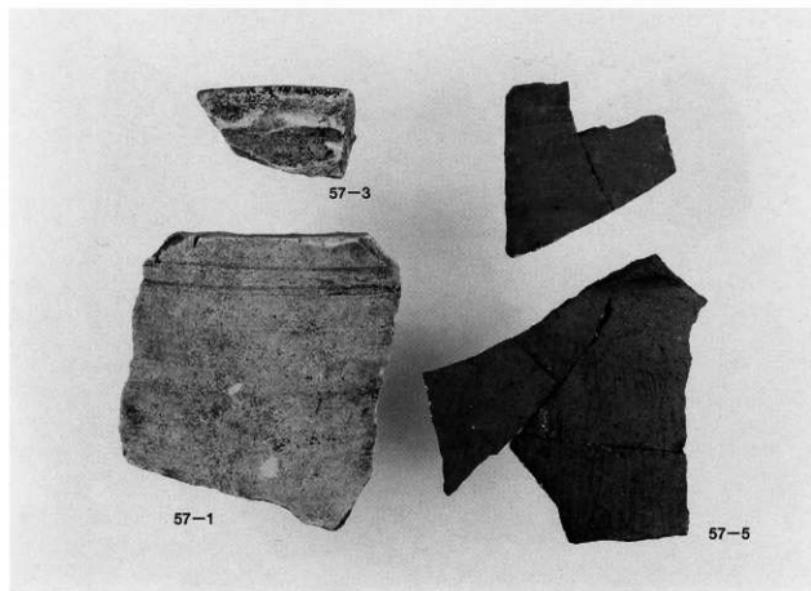
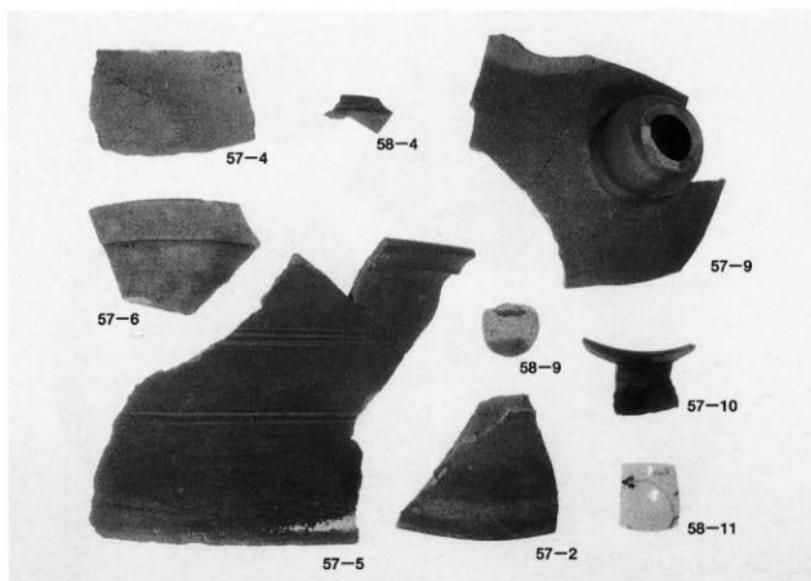
円筒埴輪

- 2~5 1 トレンチ
- 6 3 トレンチ
- 7~10 4 トレンチ
- 11~17 表探

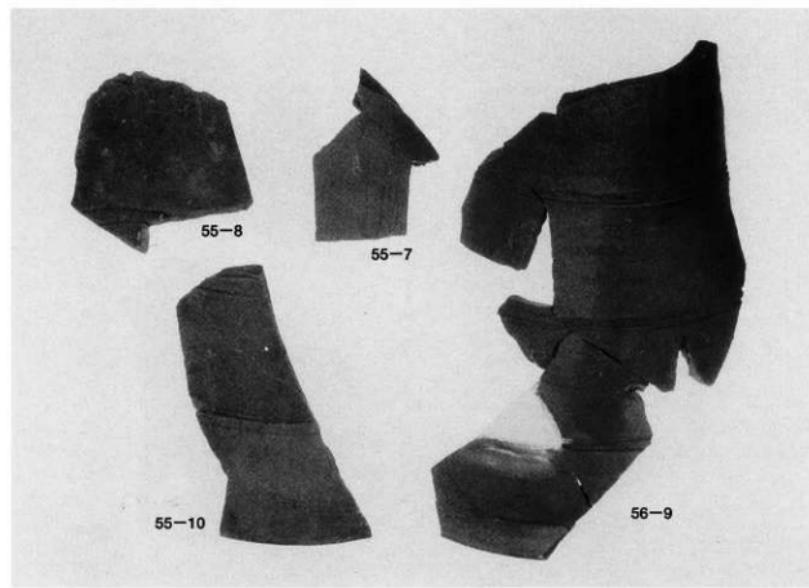
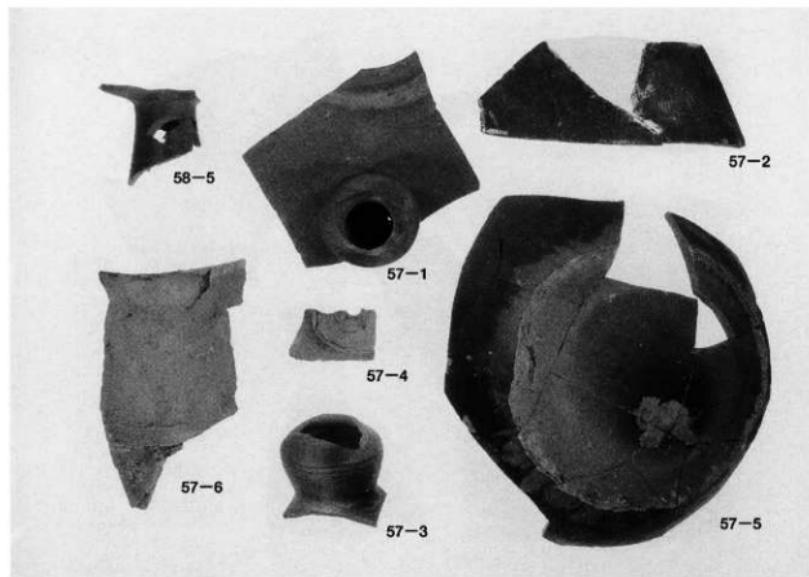
図版 12



円筒埴輪 52-1~52-8…くびれ部トレチ、53-1…1 トレチ



1 ~ 6 トレンチ出土遺物



くびれ部トレンチ出土須恵器



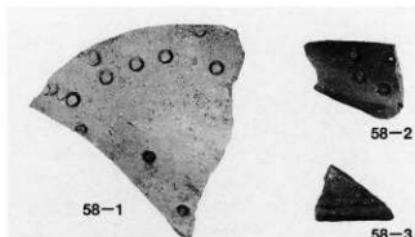
57-8



58-6



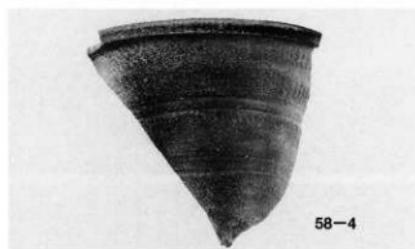
58-8



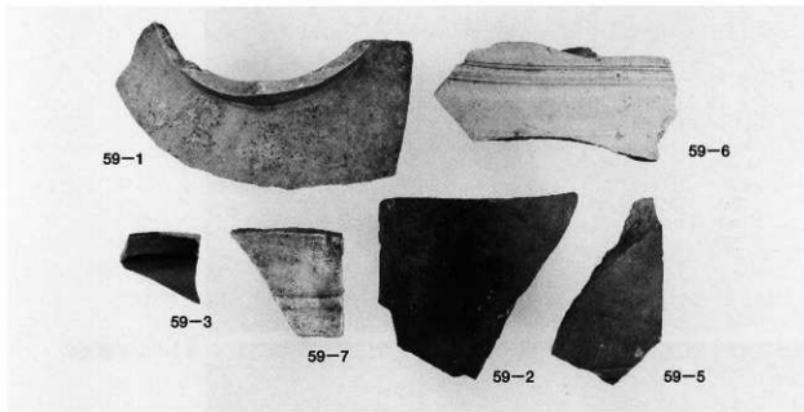
58-1

58-2

58-3



58-4



59-1

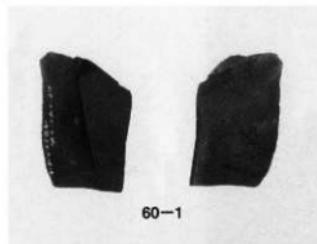
59-6

59-3

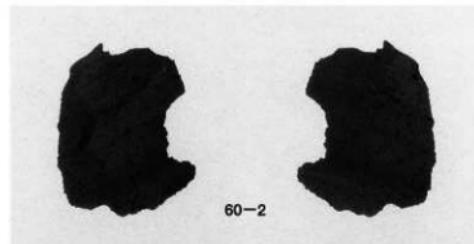
59-7

59-2

59-5



60-1



60-2

60-1、2（左・背面、右・腹面）

図版 16



後方部（東から）



後方部トレンチ調査後



9 トレンチ調査前

9 トレンチ調査後（東から）



10 トレンチ調査後（東から）



11 トレンチ（西から）



図版 18



15トレンチ（西から）



15トレンチ埴輪出土状況



18トレンチ（南から）

15トレンチ (北から)
葺石検出状況



16トレンチ 周溝検出状況

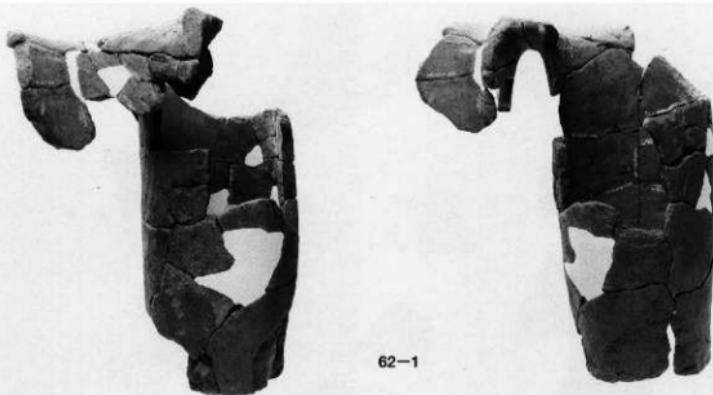


17トレンチ 周溝検出状況





後方部土層見学室填丘盛り土の状況



62-1



62-2



62-3

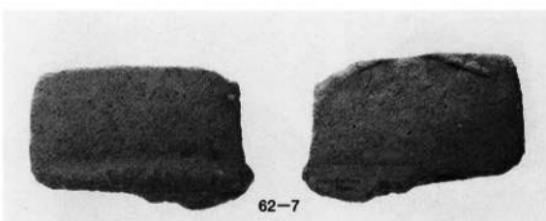


62-4

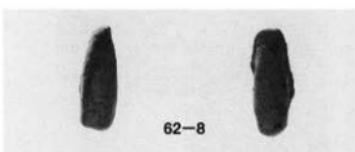


62-5

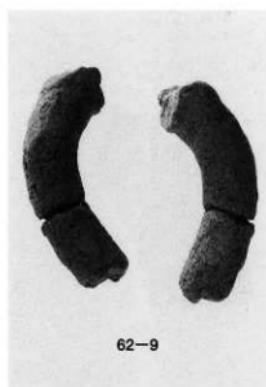
62-6



62-7



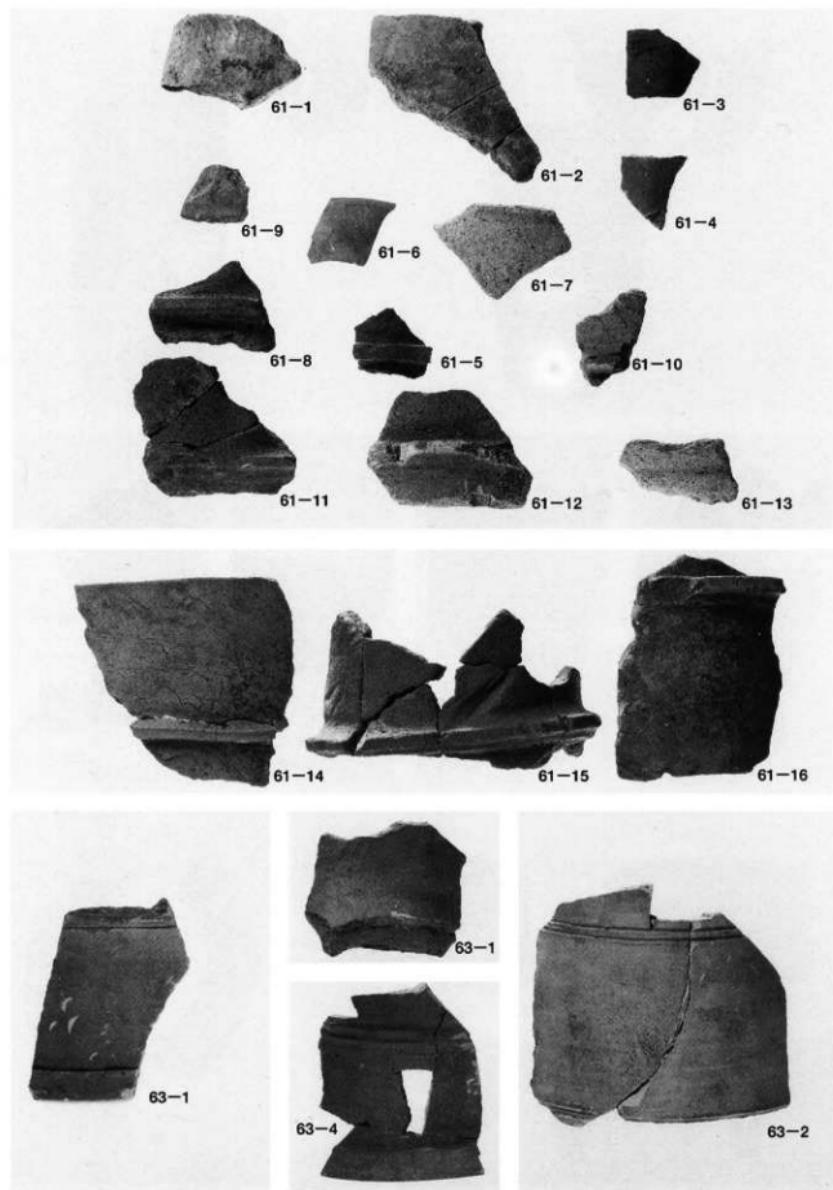
62-8



62-9

14 トレンチ出土遺物

図版 22



トレンチ出土遺物